

お願いですから

堀井清

仏壇に向かって手を合わせる。正月の三箇日が過ぎて、きょうはもう五日である。娘の加根子は、いつても五十を過ぎて出戻ってきた娘だが、正月も昨日から勤めに出ていて、自分ひとりの日常がまた始まったのだ。

その手始めにきょうから家の掃除をはじめようと、奥の間にいったとき、なぜか仏壇の前に坐る気分になった。年末の家内の命日の日に飾った切り花は、出来心でホームセンターから盗ってきたものだが、まだ傷んでいないらしい。線香も立てないでただリンを鳴らす。くぐもった音が部屋をなかに行き渡っていく。手を合わせて、暗い仏壇の奥に立て掛けてある家内の写真を手に取って見る。いつの写

真なのか思い出せない。

かなえ、元氣か。と思わずいつてしまふ。自分は何をいつているのかとひとり笑う。しかし、元氣ですよ、とかなえの声が開こえてくるように思うから不思議だ。かなえは、三年前の年の暮れに風呂場で死んだ。ヒートショックというものではない。風呂場の掃除をしていて倒れたのだった。残り湯を抜いたあとの風呂桶の中にしゃがんだままの姿勢だった。そのとき自分は庭先でモミジの木の縮んだ落ち葉を拾っていた。一仕事終えて、居間にいない家内を探して家の中を歩いた。いちばん最後にたどりついたので風呂場の浴槽だった。

どうした、と自分は異変に気付かず、当たり前前の声を出したように思う。

どうもしないわよ、といういつもの返事が返ってこないことを訝つて、また、どうしたといった。

自分の発見が遅かったのだろうか、あれから三年が経つ。生きていれば、かなえは今年七十五になるはずである。

お前は寂しくはないのか、と仏壇の小さな写真に向かつて呟いてみる、返事はない。だがふつと考えてみる、あの世というところには男はいないのか、死者は累々とそこらあたりにうごめいているはずだが、そこにいい男はいないのだろうか。

いや、かなえが興味を持っていたのは、そんなことではない。かなえは絵を描くことが好きだった。しかし大きな会派には属さず、街の美術教室で、小さな絵を描くことに満足しているようだった。題材は草花や山里の風景が中心だった。

そのかなえの当面の夢は、この街の市民美術展に応募して、賞をいただくことだった。だが教室の指導者は、いつまでもかなえの展覧さえ認めてはくれないのだった。だがかなえは、翌年の春先にもう一度挑戦するのだと意気込んでいた。かなえの人生は、その程度のことと折り合いがついていたのだ。しかし自分はどうかと思う。自分は何をしてきたのかと思うばかりである。

この街の商工会の事務所に定年まで勤めた。きちんとした組織があるのではない。ただ長年の勤めで、主幹とか副長さんとかと呼ばれていた。いわゆる事務所長の仕事を補佐するような立場だった。あとは女の子が数人いるばかりだ。

その仕事を終えてすでに二十年が経つ。自分は何をしてきたのか、とあらためてかなえの写真を見ながら思う。余暇の過ごし方として、一通りなんでもやった。競輪、競馬の賭け事、パチンコや麻雀に熱中した時期もあった。だが年を経るにつれて、賭け事はやめて、付き合いのあった仲間たちに踊らされてなんにでも手を出した。なぜかゴルフだけはしなかった。魚釣りにはじまって、カメラいじり、囲碁、将棋、サイクリングからハイキングまで。だがいま続けられていることは何もない。これはいったいどういうことか。

俳句や短歌に誘われることもあった。盆栽はどうかという人もいた。だがどこにも落ち着くことはできなかった。

そのうちにそちらに行くよ、と自分は仏壇の奥に向かつて声にしていった。この世に思い残すことは何もないのだ。

晴天の日の午後、会田時雄がふらりとやってきた。いつものことだ。前触れもなく軽自動車を訪ねてくる。車で十分ほどの距離である。

会田とは田舎が同じで、つまり幼馴染なのだが、いつも互いの人生の生きざまを見てきた。自分がこの街に来たのは、会田がこの街の警察官になったことに触発されて、彼を追うようにして出てきたのだった。

会田は手土産を持ってきた。いつも手ぶらでやってくることはない。自分が家内を失ったので、何かと不自由をしているとも思っているのだろう。しかし自分が会田の家を訪ねるときには、何かを持参したことはない。どうしてそうなるのか、自分でもよくわかっていないのだ。

年末に韓国に行ってきたよ、と会田は手土産を自分の前に差し出しながらいった。

だれと。

勿論、カミさんとだよ。

会田はよく奥さんを連れて旅行に行く。

韓国の有名なお菓子を買って来た。

ありがとう、と自分は素直にビニールの袋を受け取って、コーヒー飲むか、と問う。

ああ、と会田は曖昧な返事をして、自分の家に帰ってきたように、ずかずかと自分よりも先に部屋に上がっていく。

会田の家は六人家族である。息子夫婦と孫が二人である。それなりの敷地に母屋の隣に、母屋につながるように別棟を建てた。そこに息子の一家が住んでいる。しかし食事の時間になると、いつも会田とカミさんは息子たちにいる食

事室に行くのだという。そんなことで子どもたちともうまくやっているらしい。

そういえば、有一と会うのは今年になってはじめてだね、と会田が振り返っている。

そうだな、今年もよろしくだね、自分も会田の顔を見てきたえる。

会田はこの家にくると、居間にひと続きになった応接間の窓際に置かれた椅子に坐る。そこが自分の定位置と決めているようだ。

韓国は楽しかったかね、と自分はどうでもいいことを聞く。

そうだな、しかし基本的に日本にいるのと少しも違わないよ。

それは多分、お前が外国旅行に慣れてしまったからだよ。自分はいい加減なことをいったのだが、案外当たっているのかもしれないと思う。

お前、キムチを食うのか、と聞いてみる。自分はキムチを食べたことがない。食べたことがないのに、とても食べられないものだど決めているのである。

韓国のホテルのキムチは格別うまかったよ。会田の素直な感想らしい。

自分は台所に立って行って、コーヒーを淹れる。たとえ来客がなくても自分のために、午後になるとコーヒーを沸

どういうこと——。

だからさ、孫の翔太のことが心配なんだよ。

だから何があった。

なんとはいえはいいか、といったまま会田は口ごもっている。先ほどからどこか落ち着きがないと思っていたのだが、何か話したいことがあるのだろう。一度か二度か会ったことのある会田の孫の様子を思い出す。父親に似て大柄の若者だったという記憶がある。高校のときはラグビーをやっていたはずなのだが、そのラグビーはいつやめてしまったのだろう。

翔太くん、いくつになる。

二十一らしいよ、と会田はよそ事のような返事をしていく。

女の子をたぶらかして、そうして、逃げた。

そうか、と自分はいったが、そのあと、翔太くんなかなかやるじゃないか、と続けた。

やり過ぎだよ、と会田はいつ、自分の顔を睨みつけてくる。

たぶらかすとは、なんだ。いやに古めかしい話だな。

仕方がないのでそのように問い返す。

会田は無言でコーヒーを飲んで、カップを受け皿に戻す。翔太はさあ、バイトしているラーメン屋の、やつぱり同じバイトに来ている女の子と関係を持ってさ、妊娠させた

かす。しかしこのごろ、外のコーヒーを好むようになってしまった。けれどコーヒーの味はわからないままだ。自分が淹れるのは、いわゆるインスタントコーヒーではないが、うまいかどうかどちらでもいいことだ。

会田は勝手にテレビのリモコンを使っている。とくに目当ての番組があるというのではないらしい。どこか苛立っている様子が見える。

会田の前にコーヒーを運ぶ。いつものことだ。ありがたい、ともいわない。テレビは昔のテレビドラマの再放送である。その画面を見ながら、コーヒーカップを口に運ぶ。この土産、開いていいか、といって、彼が持ってきた包みを開ける。クッキーのような焼き菓子である。それを一つつまんで食べる。これまでに味わったことのない奇妙な甘さの残るお菓子である。

加根子ちゃん元気か、と不意に会田が問うてくる。五十過ぎの出戻り娘のことをちゃん付けで呼ぶのはおかしいのだけれど、会田は娘が小さい時から知っているからである。元気にはちがいないが、これからどうするつもりなんだろう、と自分はこたえる。

八十の親が、うろろうしていたのではどうにもならないんじゃないか。

なんだ会田、お前、娘の先行きまで心配してくれるのか。いや、心配してほしいのは、俺の方だよ。

んだ。

そんなの、なぜお前が知っているんだよ。

女の子の親が、ふたりそろって俺の家まで抗議に来たんだ。

いまだき、そんなことがあるのか、それもこのお正月にか。そう、昨夜のことだ。

お前、会ったのか。

俺の家だからな、玄関にその両親を迎えたのは俺だ。話を聞いたのは無論息子たちだ、俺はただ傍で話を聞いていただけのことだよ。

その女の子って、いくつだ。

翔太より二つ上で二十三ということだった。どこかの大学の、もう一つ上の大学に行ってるということだった。

つまり、ふたりとも大人じゃないか、詰まらない。

そうだよな、大人の出る話じゃないよな、いやなら子どもをおろせばいいことだよ。

お前、そのことを親にいつてやらなかったのか。

自分は会田に詰め寄るような言い方になった。

娘を傷ものにしたと、相手の親はいたいらしかった。

しかしそのあと、翔太は逃げているというんだよ。

自分には会田の家で起きていることがうまく理解できていない。

当事者である女の子の話では、自分が妊娠していること

を翔太に告げた後、彼と会うことができなくなっているという。そこで親が出てきたらしい。

それで翔太くんはどこへ逃げたのか、お前、知っているのか。

俺が知ってるわけではないよ、翔太はこれまでに、友だちのところ泊まりに行ったり、黙って一人で海外にも行ったことがある。何日も翔太を見ないことがあったよ。それで問題は何もなかった。

しかし今回は、怖くなって逃げたのか。そのように取られても仕方がない。

困ったな、と自分は我が事のように眩いていた。本当は困ることは何もないのだが、行方不明というのは困ったことだよ。

それで、結局どういうことになった。

ひとまず、翔太と娘さんが結婚する気があるのかないのか、それを両家で確かめるということらしい。

しかし翔太は二十一で、大学生だろう、結婚は早過ぎるだろう。

それでこの話は終わりになった。

隣の八尾さんの奥さんが、インターフォンを鳴らしてから、内庭に入ってくる姿が窓から見えた。庭の犬が吠えている。

玄関に出て行って迎える。

あす、亡父の法事をしたいので、庭を駐車場として使わせて欲しいという話である。

自分は即刻了解する。これまでも一、二度あったことで、こちらには何の支障もない。いつも空いている庭である。平生は娘の加根子が軽自動車出勤してしまえば、自分は事故を起こして車を手放してしまつたので、庭はそれなりの広さのある空地になる。

八尾さんの話では親族が集まってくるので、四台ほど入れさせてほしいという。

自分の父はいつ死んだのか、とふつと思う。自分は父の法事をしたことがないのだ。父が死んで何年になるのか、自分が三十歳の頃のことだから、およそ五十年も前のことになる。すでにそのとき自分は家を出ていて、この街にいた。だがまだこの住まいを手に入れる前のアパート暮らしだった。

実家はずっと兄が仕切ってきたのだが、現在はすでに次の代に移行している。自分はもうどれほどの期間、里から離れていることになるだろう。

自分が育った実家の庭も広がった、いつてみれば旧態とした百姓家の造りだったように思う。その庭先で、会田時雄とよく遊んだ。いや、同年の時雄ばかりではなく、隣家の女の子や、近所のガキ友がいつも集まって来ていた。あ

の庭はいまどうなっているだろう、やはり駐車場などに様変わりしているのちがいない。考えてみれば、あの庭があつて、その記憶に誘われて、自分は広い庭のあるこの家の中古のまま買うことにしたのだ。

自分が交通事故を起こしたのは、三年ほど前のことになった。妻のかなえを失って間もないころのことだった。

その日、自分は何も用がないのに、いや、新しい喫茶店でも見つけるつもりで、車を走らせていたらしい。使っていたのはセダン形の大きな車だった。そこは片側二車線の市道だった。平日の朝の十時頃のことだ。狭い真直ぐな車道に、左手から不意に黒い影のようなものが突き出てくるのが見えた。自分は思わず息をのんでブレーキをかけたのだが、一瞬の違いで間に合わなかった。車の左の角で人を打つたのだ。ドンという鈍い音がして、その衝撃がハンドルを持つ両手に伝わってきた。

黒い人影が車の前方に転がっているのがフロントガラス越しに見えていた。

おい、どうしたんだ、と自分はひとりで声を出したのだが、無論その声が相手に伝わることはないのはわかっていた。しかしこの事態がだれかに見られていることはないのかと、車内から四方を見回してみる、これは決して自分の不注意ではないのだと、繰り返し自分にいい聞かせていた。そのあとようやく、自分はゆっくりと車の外に出ていっ

たのだ。ゆっくりとしていたのは、自分を落ち着かせるためだった。運転歴四十年のはじめての体験だった。

倒れている男に近づいていき、四つん這いのような形で蹲っている相手の体を見下ろしていた。

どうしましたか、と自分はいったようだ。他に言葉がないのだった。

倒れているのは確かに男だった。厚みのある黒いジャンパーを着ていた。自分と似たような年恰好と見えた。

どうしました、大丈夫ですか、とまた自分はいった。

男がむっくりと体を起こしぐるりと首をまわしてこちらを見た。老いた男だった。顔の全体に皺がよって、あごの髭が白くくすんでいた。

天国に行くのですよ、と男はいった。自分にはそのように聞こえた。

えっといつて自分は男の顔を覗き込んでいた。男はそこで立ち上がろうとするのだが、うまく体が動かないようだった。

どこを打ちましたか、どこが痛いですか、と自分は聞きたくないことをいつていた。

お願いですから、天国に行かせてください。

こんどは男の言葉がはつきりと聞こえた。

あらためて男は立ち上がろうとしていた。思わず自分は男の二の腕を掴んで支えようとしていた。男はゆらゆらと

体を揺らしながら、それでもようやく立っていることができたのだった。

黒い車が一台、自分の車を除けるように追い越していった。遠くで老女がひとり立ち止まってこちらを見ていた。

その視線に耐えながら、もう一度男の顔を覗き込んだとき、男はいったのだ。

あんたさあ、早くどこかに行った方がいいよ。

そうですね、と自分は曖昧にこたえたのだが、しかしまだその場に躊躇していた。

早く逃げて行くのがいいよ、俺のことはいいからさ。

男の表情はむしろ笑っているように見えた。

自分は男の笑顔を信ずることにして、急いでその場を離れたのだ。逃げるように車に戻り、むしろ急発進して大きな音が出ないように用心しながら、ゆっくりと静かに遠ざかっていったのだ。その男が、その後どうしたのか知らない。男が傷ついているとすれば、腰のあたりを打っていると思うのだが治癒していることを祈るばかりだ。けれども、以後その現場に続く道は使えなくなり、駅前に出るときは迂回することになった。そうして次第に、車を使う自分が許せなくなっていたのだ。

この頃、何気ないときにふっと思い出すのである。天国に行きたいと男はいったのだが、本当のところは、男は自分に何を伝えたかったのだろう。殺してほしいということ。トレイを胸に当てたままじっと待つているのである。なぜかやさしさが伝わってくると、自分は勝手に思っているのである。

コーヒーを下さいという。

ホットコーヒーですね、とユキちゃんは復唱する。

そうしてくると体を回転させて去っていく。自分はその後姿を見送っている。ミニスカートの裾からユキちゃんの太くて白くて、柔らかな足が、ずっと奥まで見えている。見えるような気がする。それだけのことだ。だがその一瞬の時間のうちに、人生っていいなあと思うのだ。その思いは、この場所に来て彼女の足を見るたびに思うことなのである。

遠くの席に初老の夫婦が向き合って坐っているのが見える。ときどきこの店で見かける夫婦である。いつか、店を出ていくとき男が左の足を引きずっていることに気付いた。交通事故に遭ったのだろうかと考えてしまう。小さな段差も左足を上げることが難しいのだろう、女性が男の体を支える姿を見たことがある。しかしきょうはどこか様子がおかしい。互いに無言のままテーブルを挟んで睨み合っているように見える。

天国に行きたい、という言葉が不意に蘇ってくる。あの事故のあと、何の前触れもなく車に当たった男の言葉が出てくるのである。自分は八十になったが、あの男も似たよ

だったのか。男は自分にひき殺して欲しかった、そうして天国に行きたかった、もしそういうことであるならば、男は自分の車に向かって体を投げ出していたことになるのだが、男の動作はあまりにも緩慢だった。男はきつと考え方を改めなければならぬ、彼は車では死ぬないことを悟るべきだ。しかし、男の願望はどこまでが正気のことなのかわからないままだ。そうして、天国に行きたい男の、現実の生活とはどんなものだったのか、と考えてしまうのだ。天国に行きたいのは自分もまた同じだ。

天気のいい日は午後になると出かけたくなる。といつても行き先は近くの喫茶店である。(みやび)という名の店だ。格別コーヒーが旨いわけではない。所詮喫茶店というのはそんなことだ。少しゆっくりした時間が持てるかどうか、それだけのことだ。

店に入るとどの位置からも厨房など奥が見えないので、落ち着いて過ごすことができる。ドアを閉めると、どこからか、いらっしやいという声が聞こえてくる。読むことのない週刊誌を一冊持って適当な場所に坐る。平日の午後は、大方女店員はユキちゃんがひとりである。自分はそのユキちゃんを見ているだけで癒しになるのである。

水を運んできて、お待ちしていました、とユキちゃんはいつて、自分の顔を見ている。自分が何か答えるまで、丸

うな歳だと見えた。顔に深い皺が集まっていた。細い貧相な表情をしていた。男の日常は地獄だったのかもしれない。せめてあの世は天国でなければならぬ。

コーヒーが運ばれてくる。お待たせしました、とユキちゃんはいう。自分のなかの曖昧な想念の羅列が中断する。ユキちゃんはまた、くるりと体を回転させて奥の方に去っていく。自分はユキちゃんのはち切れそうな太腿を見ている。少しだけ胸が躍るのが自分でわかる。

力づくで女性を襲いたいという願望があった。長い間の、自分の人生の長さと同じほどの永遠の願望だった。女ならだれでもいいのだった。目標はあの肉の塊なのである。

この願望は妻のかなえと結婚しても、また自分に子どもができて失せることのない幻想だった。多分、男の性欲というものには限りがないのだ。けれどもその妄想自体を、一度としてその究極の地点まで思い尽したことはない。この世の出来事と同じように、自分の妄想もまた満たされたことはない、その極みにのぼりつめたことはないのだ。

コーヒーを飲む、一緒に運ばれてくる小皿に盛ったピーナッツをつまむ。

だがこの歳になって、なぜか女ならばだれでもいいとは思えなくなった。どんなときも女は美しくなければならぬ。けれどもその美しい女と、一度として出会ったことがないように思う。美しい女性など、この世には一人も存在

しないのかもしれない。

ボックス席の女が、いきなり面前の男の頬を打つのが見えた。強烈な平手打ちだった。けれども男も女もただ無言だった。それから女はゆつくりと周りを見回し、小さなバッグを手にして席を立つていく。店のスピーカーからかすかにBGMの音楽が流れているのだが、室内の静けさが満ちているように感じられて仕方がない。そのなかでユキちゃんの、ありがとうございましたという声が響いていた。

しばらく坐り続けていた男が、やがてゆつくりと立ち上がり出口の方に向かう、だが介護の女性は行ってしまったのだ。左の足が体の後ろに残って、体全体をうまく前方に押し出すことができないらしい。ユキちゃんが男の緩慢な動作を、トレイを胸に抱いた姿勢で見送っているのだった。何がありましたか、とひとり自分は胸の内に聞いてみる。無論こたえはない。けれどもどこかで、叩かれてしまいたよ、という男の自嘲の音が聞こえてくるようでもある。弱者はいつも弱者のままで生きなければならぬのか。

自分はこれまで幼少の頃を含めて、人を叩いたことがない、また人に叩かれたこともない。なんとという凡庸な人生だったか、と思うばかりだ。

庭のハマちゃんが吠えている。ハマちゃんという名前は娘が付けた。家のカーテンの隙間から庭先を覗いてみる。

怪しいところは何も無い。今朝の散歩は済ませてある。朝食もきちんと与えている。ハマちゃんはなぜ吠えるのか、だが自分は、庭先に出ていって確かめてみる気力が生まれない。家の中で犬が泣き止むのを待っているばかりだ。

犬というものは、吠え方で大方のことは類推できるものだと思うのだが、このごろはそれがさっぱりわからない。犬にも認知症というものがあるのではないか。

ハマちゃんは、生前のかなえとホームセンターに寄ったとき、たまたま偶然に出会った犬である。ハマちゃんは、金魚やハムスター売りの片隅にいた。それはまるで売り物ではなく、ゴミ箱が置かれていたといった風情だった。ハマちゃんは犬小屋から顔を出して、怯えた眼で自分たちを見ていた。悲しい表情をしていた、何が悲しいのかはわからない、だが悲しいと訴えているのにちがいないと自分は勝手に理解していた。

耳の先が垂れ、ヤニを溜めた尻尾も垂れていた、小型の雑種犬だった。だが妻のかなえが買って帰るといので、犬小屋ごと買ったのだ。その犬にどんな名が付けられていたのかはわからない。だが家に連れて帰ったとき、出戻っていた娘の加根子がハマちゃんと勝手に名前を付けたのだった。その名前の由来を娘に聞いたのだが、娘は笑ったままでこたえなかった。以後ハマちゃんの名前のいわれは、わからないままだ。けれども恐らく、ハマちゃんというの

は、娘を振った男の名か、娘が相手にしなかった男の名かのどちらかだと自分は思っている。

自分が育った田舎にも犬がいた。大きな犬だった。名前はなんといっただろう、確かタケオといったのだと思う。人の名前のようにで気味が悪いとずっと思っていたはずだが、はじめタケオは、竹のように細い体をしていただけではないか。しかしタケオは急速に成長して、肉が付いてきて二年も経たぬうちに、自分ひとりの力では、タケオに対抗できなくなっていたのだ。タケオが夜吠えるとき、その低い声は空気をふるわせて、なぜか地面が揺れるように自分には感じられるのだった。

田舎の村で近くに住む会田時雄に、タケオはよく懐いていた。時雄が遊びにくると、タケオは太い尻尾を激しく振って歓迎するのである。

タケオ元気が、と時雄が頭を撫でると、さらに猛烈に、千切れるのではないかと心配になるほど尾を振るのである。そうかわかったよ、と時雄がいうと、ようやく納得したように時雄の顔を見上げながら、その回りを行ったり来たりするのである。

時雄とはよく遊んだのだが、いつも時雄が先頭に立っているのだった。学校に通じる田舎道の途中に、村の消防団の小屋があつて、その前庭の小さな空き地に、ガキどもは集まってくるのだった。メンコやビー玉をして遊んだ。し

かし何をしても自分は負けるのだった。なぜ負けるのか、その当時にはわかっていなかったのだが、いまになってわかる。要するに自分が負けるまで、そのゲームは続くということである。それだけのことだったのだ。

時雄とはよくキャッチボールをやった。粗末なグローブで布製だったように思う。グローブは小さく手袋をはめているようなものだ、時雄が力任せに投げられるボールは、素手のまま受け止めているようで痛かった。しかしボールは軽くて、たった一個しかないもので、糸がほつれてきて、長い糸くずをぶら下げたままのボールが飛んでくるのだ。それでもキャッチボールは楽しかった。

会田の家に行つてやろう、とふつと思つた。今年になつてから、まだ一度も彼の家を訪ねてはいない。その後、時雄の孫の翔太はどうしているのだろう。アルバイト先の女の子を妊娠させて逃げたという話の顛末を自分はまだ聞いていないのである。

会田の家はこの街のはずれにあつて、何十年前前に建てたという古家を買つたものである。いくら古くても会田には田舎への郷愁があつて、母屋と別棟のある屋敷を求めていたのだという。その家を毎年少しづつ改修して、いつてみれば継ぎはぎの建物のようなだが、それなりの強度に耐えているというのだった。

床の間には一刀彫の木目の美しい壺や、置時計などがかた雑に置かれている。少しは整理してはどうかといたいところだが、黙っている。

めしは食つたか、と時雄はいう。丁度一時を過ぎたところである。駅前でラーメンを食べてきたことを正直に伝える。

有一はビールよりコーヒーだったな、時雄は諦めたような声を出す。

そういうことだよ、と自分は答える。そうして、きょうもまた手ぶらで来てしまったことを少し悔いているのである。

園子さんは勤めか、と問う。園子さんは会田の奥さんで同郷の人である。七十八になるはずなのだ。田舎の遠い親戚にあたる人だと、昔聞いたことがある。

駅前の商店街の雑貨屋にアルバイトで出ている、相変わらずだよ、と時雄はいう。

元気で、うまくいってればそれでいいさ、といつもの自分のセリフだ。

時雄が台所の方に立っていき、自分は手持無沙汰になつて、見馴れた室内を見回している。部屋の隅に石油ストーブが置かれていて暖かい。

園子さんは七十八だというのに、勤めに出ているというのはどういふことかと思わぬでもない。自分が今日ここを

敷地を画する長い土の塀に囲われた大邸宅である。幅広の門をくぐつて入ると、大きな松や梅の木が立っている。だだっ広い庭に白い乗用車が一台停まっている。会田が在宅している証拠である。ここから街に出て行くには、近くの公共機関を頼るとしても、そこまではどうしても車が必要である。

母屋の玄関扉をガラガラと開く。こんにちはと声を出す。奥の方から物音がして会田が顔を出す。

おお、と声を出して、一段低い板の間に下りてくる。どうしてきた、と彼はいうのだが、なぜ出てきたかといっているのではない、どんな手段でここまで来たのかと問うているのである。

この近くまで、タクシーを使つたよ、と自分はこたえる。電話をしてくれれば迎えに行くよ。

この辺りを少し歩いてみるのも楽しいことだよ。

まあ上がれ、と時雄がいう。少し歳を取つたのではないかと、前かがみになつた時雄の姿勢を見ながら思う。それとも、彼が着ている厚みのある丹前を見たからだろうか。だが所詮、自分もまた似たような体型をしているのにちがいないのである。

広い土間を改修して板の間にした。その床がよく磨かれていて滑るようで怖い。

いつも通されるのは床の間の付いた十畳ほどの和室であ

訪ねてくることは、昨日から伝えてあるのだから、園子さんの顔を見ることができると思つてきたのだ。このことは時雄に是非問うてみなければならぬと思うのだが、それらのことを瞬時のうちに忘れてしまうのがおかし。

時雄が危ない手つきでコーヒーを運んでくる、それをそつと座卓のうえに置く。

暇を持て余しているようだな、といつて時雄の顔を見てしまう。考えてもいない言葉だった。

そうだな、暇しているよ、と時雄はぼんやりした表情でこちらを向いてこたえる。

時雄から返事を聞いてもそれだけのことだ。そこから新しい何かが発見できることはない。

暇していることが罪のようにかね、と時雄は座卓のうえに手をついたままで問い返してくる。

そんなつもりはないよ。自分は急いでこたえるのだが、時雄の意外に真剣な表情に驚かされる。

俺も暇なのだから同じことだよという。

そうかもしれないな、罪かもしれないな。人間、ただ生きているだけじゃあ、どうにも仕方がないんだ。自分にとつても、世の中にとつてもいいことは何も無い。

家族がいるじゃないか、お前には奥さんがいて、孫までそろえているじゃないか、お前のところは全部で六人なんだよ。俺のところはたったの二人だ。

そんなの関係ないよ、家族のなかで余計者は俺だけだ、家内は働いているよ、それなりに役に立っていると思うよ、そうじゃないか。けれども俺は、ただここにいるというだけのことだよ。

俺はどうなる、と自分はいった。

そんなこと知るか、自分で考えろ、お前が持ち出してきた話なんだよ。

時雄は自分の顔を睨みつけている。

そうだよな、俺がいなくても悲しむ者はいない。

娘がいるじゃないか。

どうだろう、いまでも俺がいるために自由な恋愛ができないと思っっているのではないか。

自分は自分の発した言葉に驚いている。娘の加根子は五十になったところだ、いま再婚できる最後の境界線に立っているのかもしれない。

しかし俺たちは少し考え方を変えたらどうだろう、有一の場合は余計者ではなくて、お前がいるお陰で、娘さんは生きがいを見つけたというように思うことにしてはどうか。

毎朝、自分のために食事をつくる加根子の立ち居振る舞いを思い出してみる、やはりどこか亡妻のかなえに似ているのではないか。

この間話した翔太のことだがね、なんのことはない友だ

く、自分が持参した買い物袋の方に落とし込んだのだった。唐突の思い付きだった、いや自分の行為が説明できない一瞬のひらめきともいえることだった。そうして数日前、ホームセンターで仏壇用の小さな切り花の束をかばんの中に入れたときの感覚を思い出していた。またやったのか、と思っただ。だが酒瓶を棚に戻すことはなかった。

自分はゆっくりとその場から離れた。けれども店の黄色い買い物かごのなかは空だった。このまま店を出て行くのはまずいのではないかと思った。そこで店内をゆっくりと歩いて、ヒラメの刺身を買った、次にサバの水煮の缶詰をかごに入れ、女店員のいない自動精算機でその二点の精算をして店を出たのだが、そこで背後から肩を掴まれたのだ。お客さん、申し訳ないがこのまま帰ってもらっては困るのですよ。もう一度店に戻ってくれないかね。

そういったのは、いないはずの警備員だった。警察官と似たような制服を着ていた。そんな制服を見れば、もう観念するほかないだろう。

引かれていったのは、店の裏手の狭い事務室だった。二部屋続きで、奥の部屋は従業員の休憩室のようだった。二、三人の女性従業員が雑談をしていた。その手前の部屋の大きなテーブルを前に自分は坐らされたのだった。

日本酒の五合瓶は重かった、指示されるままに刺身と缶詰と一緒にテーブルの上に並べて広げた。

ちの家に厄介になつていたよ。その翔太が昼間に、俺の所に電話を入れてきたんだ。俺はうれしかったね、そのときだけは、俺もこの地球上の余計者ではないのかもしれないと思つたものだよ。

相手の女の子は妊娠しているといつてたじゃないか。

そのことは、翔太本人に任せたいと思っっているよ。どうすればいいかは、本人たちが決めることだよ。

そのスーパーマーケットには警備員はいないと思つていたのだが、売り子の女店員に見つかり事務所に通報されてしまったのだった。

自分は、行きつけのスーパーマーケットで万引きをしたのだった。だが無論、万引きをするために店の中を歩いていたのではない。夕食の食材などはすべて娘に任せてあるのだ、自分は基本的に買い物をする必要がないのである。

そのとき食料品売り場にいたのは、このごろ少しずつではあるが、晩酌に日本酒をいただくことにして、そのことが頭にあつたからだろう。勤めていたときの仲間からめずらしく電話があつて、その折に雑談のなかで、その仲間も晩酌を楽しんでいるということだったのだ。

自分はそのとき酒類の売り場にいた。いくつも並んでいる五合瓶の日本酒を見比べていた。そうしてその内の一本を手にとったとき、左手に下げていた店用のかごにはな

警備員の男は自分よりいくらかは若いのだろうか。

どうしたのかね、おじいちゃん、自分のしたこと、わかってよね。男はそういった。

わかっていない、と自分はこたえようとそのとき思った。これから先何が起きるのか体験してみたいという不埒な考えに及んだのだった。それでしばらく沈黙していた。

けれども、名前はと聞かれ、家にはだれがいるのかと問われたとき、娘の加根子の顔を唐突に思い出したのだった。すみません、悪いことをしました。お願いですから、お赦しください。

自分は大急ぎで椅子から立ち上がり、繰り返し頭を下げた。自分には出戻りの娘がいるのだといった。

この店では初めてのことよね、と奥の部屋から責任者らしい女性が声を掛けてくる。その言葉が救いだつた。

万引きするのは何度目、と警備員が女性の声を無視するようにいう。

はじめてのことです、と自分は直ちにこたえた。

違うだろう、初めてということはないだろう。

男は、自分の顔を覗き込んでいる。

いえ、初めてです、と自分はまた大急ぎでいった。

あんた、それにしては随分、慣れた手つきだったよ。

自分にはこたえる言葉がない。だが、万引きをするときは、きつこうするものなのだと、買い物袋を左手に提げ

て、そこに目当ての品物を入れるといった動作を繰り返して、イメージしたことであった。

今度、見つけたときは容赦しないよ。娘さんを悲しませたいじゃないよ。

男の真剣なまなざしを見ていた。

その通りです、と自分は神妙にこたえたのだった。

自分はこのごろ、テレビを見ることが少なくなった。歳を重ねるごとにテレビを消していることが多くなったように思う。だがきょうは、退屈しのぎにテレビのリモコンのスイッチを入れた。日本の地方鉄道の旅を伝えている、つまらない。チャンネルを変える。芸能人が麻薬を使ったとあって追跡されている、つまらない。またチャンネルを変える。男が半裸の女の体をねじ伏せようとしている。女が足をばたつかせて抵抗している。もつとやれと、と自分は画面の男に声援を送っている。だが、男女の動きは次第に鎮まって、女は観念したのだろうか、男の背中に回した腕に力を込めている。つまらない。仕方がないのでリモコンのスイッチを切る。

いつも自分は、この時間帯は何をしているのだったか、思い出せない。例えば昨日はどうしていたのか、そう、スーパーで万引きをしたのだ。捕まってしまった、もう万引きはしないと心底から思った。一昨日は何をしていたのか、

公民館に行っていたのか、図書館だったか思い出せない。またテレビを点ける。いま絡み合っていた男女が、明るい喫茶店で頭をぶつけるようにしながら語り合っているシーンである。話の内容がわからない。おそらく、相手の愛を確かめ合っているのではないか、つまらない。

女を犯したい、と思う。自分にはもう実行する気力も体力も失っていることはわかっているのに、女を犯したいと思う。時々襲ってくるその想念を止めることはできない。

何年前かは、人を殺めたいということだった。その観念は自分のなかでどのように処理することができたのか。いや、単に歳を取っただけのことなのだろう。

どんな手段で人を殺すのか、ということを考えていたように思う。拳銃かナイフか、それとも素手で相手の首を絞めるのがいいか、ナイフならば、どこをどのように刺すのか、そのイメージはうまく結実したことがない。殺す相手はだれでもいい、ただ殺すことが出来ればそれでよかった。人は大方、そんな願望を一度や二度は考えるのにはちがいない。だがそのような虚しく果てのない夢想を紡ぎながら、この一生を終えるのか。もつと建設的にもつと前向きに、これから永遠に続くであろう人間の営みに、小さなことでいい、何か支えとなるような行いはないのか。自分がそのような無益な夢を追っていたのは、この世において本当のことなど、何もないということであつたはずだ。自分

が生きていることの、この世での根拠といったことについて、それなりの考え方を求め続けていたように思うのだ。

テレビのスイッチを切る。音が止んで静かになる。当然のことだが、何も聞こえない。家の前を車が走らない限り、まさに無音の世界なのである。

娘の加根子はいくつになるのだろうか、とふつと思ふ。自分の親族は次第に遠くなつていき、娘が一人残つていることになる。彼女はけさも早くに勤めに出ていった。彼女の稼ぎがなければ、この家の収入はまかないきれない。

加根子は駅前の雑居ビルの地階にある総菜屋で働いている。仕入れからはじまって、何種類かのお総菜をつくり、それからチラシを作つて売り子まで、店主の女性と二人だけの仕事である。品物の売れ行きは日毎に違っていて、予想が立ちにくい。ほとんど毎日、売れ残った煮物など、明日に回せない商品を持ち帰ってくる。筑前煮や、きんぴらごぼうや、マーボ豆腐もある。しかしそれで我が家の食費が助かっているのは確かだ。

だが彼女は、自分の人生をどのように考えているのだろうか。付き合っている男はいないように見えるのだが、それでいいのだろうか。

一度夕食時に、このままの生活でいいのか、と聞いたことがあつた。

なんのこと、と加根子は無邪気に問い返してきたものだ。

お前の、身の振り方のことだよ、などと聞いたように思う。何も考えていないわ、と彼女はいった。

それきりだった。ただそのとき、自分がいいかかったことは、自分がボケてしまつてからでは、もう遅いということだった。何が遅いのかはよくわからない。だが、ボケてしまつた年寄りを一人置いて、男のところに行くなどということは、できないはずだと他人事のように思う。しかし所詮、自分のこれからさきの運命は、娘の手の中にあるということだろう。

そもそも加根子はなぜ出戻つてくることになつたのか、結婚生活が続いていたのは、十年にも満たない。それから十五年ばかり、加根子にとってはすでに遠い過去のことになつたのか。

加根子の夫は、小さな出版社に勤めていた、加根子とは職場結婚だった。小さな社内では二人は見初め合い結ばれたのだ。だが互いに、異性を見る目が乏しかったのにちがいない、けれども別れることになつた本当の理由を自分には知らない。相手の不倫ということではなかった。共働きであったから、経済的には不満はなかったはずだ。するとなんだろう、二人には子どもがでなかつた。そのことに関連があるのだろうか。性格の不一致、まことに便利な言葉だ。相手の一挙手一投足が気にいらなくなれば、性格の不一致なのだ。きつと加根子もそういうことだったのだと自

分は決めてしまった。

庭のハマちゃんが吠えている。吠えているといつても、恐怖に怯えているのではない、家の者に来客があることを伝えてくれる声である。カーテンの隙間から庭を見る。女性の来客である。自分は玄関先に出て行く、民生委員の田口さんという地域の委員である。自分は娘と同居しているのだから、独居ではない。見回りの対象からは外れているはずなのだが、田口さんは、月に一度ずつ見回ってくれるありがたいことだ。自分はとっくに後期の高齢者だからであらうか。

お元気ですね、と問われる。

見ている通りです、いまのところ何も不安はありません、といった。だがそういつてしまつてから、さて自分は死後、天国に行けるのであらうかと思う。自分の車に当たつてきた男の姿がよみがえつてくる。

血圧の方はどうですか、高くはありませんか。

娘が野菜中心の食事を考えてくれてるので、血圧は高くないと思つています。

いい加減な回答である。本当に加根子が自分の健康のことを考えてくれていいのかどうか、あやしい。いや、多分加根子は何も考えてはいないだらう。

ここまでは、毎回、似たり寄つたりの会話である。

ご近所とのお付き合いはありますか。

うが、一つも自分の耳には届いてこなかつた。聞こうとしなかつた。自分は余程のうつけ者なのである。

久しぶりに喫茶店（みやび）に行く。午前の十一時だ。店のドアを開けた瞬間に、ユキちゃんに会いたいと思う。そうして次の瞬間にはユキちゃんの元気な声が届いてくるはずなのだが、それがなかつた。確か先回もユキちゃんは休んでいた。どうしたことだらう。

店内を見回し空いている席をさがす。店は空いていてどこに坐るのも自由だ。

いらつしやいませ、と初めてみる若い女店員が水とタオルを運んでくる。その少女の顔を見上げて「ユキちゃんはいないの」と聞いてしまった。

ユキちゃんはやめられたそうですよ、と新しい店員はあつさりといった。そうして自分の傍らに立つたままである。

コーヒを下さいという。そうして彼女の後姿を見送つている。ユキちゃんと同じように、貸与品らしい短いスカートから足が見えているのだが、なぜか魅力を感じない。ユキちゃんはなぜこの店をやめたのだらうか、結婚するにしては少し早過ぎると思うのだがどうだらう。

コーヒが運ばれてくる。慣れた手つきでテーブルの上に置かれる。

問われていることがよくわからない。

何も問題はありませんよ、町内の回覧板が回ってくるだけのことです。

それはいけませんね、と田口さんは即座にいう。

町内のお年寄りのクラブには入らないのですか、と続け

ていう。

入っていません。

町内からクラブからのお誘いはないのでですか。

あつたとは思いますが、忘れてしまいました。

案内外楽しいのかもしれないよ。ベタングとか、グラندوقゴルフとか。カラオケ大会もあるのじゃないですか。参加されてはどうですか。

ありがたいございました、といつて自分は田口さんに背を向けて家に戻つたのだつた。

結局、自分は人との共同生活が苦手なのにちがいない。

定年まで無事に、街の商工会に勤められたところが不思議だ。きつと組織が小さかつたからだらう、しかし勤めている間は、仲間に誘われて大方のことはやってきたと思うけれども振り返ってみれば、その遊びに一度も充実感を覚えたことはない。つまり生活には困らなかつたから、いろいろのことが出来たのだ。

人生の本当のことを知りたい、とふつと思つた。先人はきつと、人生について多くのことを考え、語つてきたのである

ユキちゃんはどうしたの。八十の男が聞くことではないのかも知れぬと思ひながら聞いている。

通りの向こうのスパゲッティ屋さんの店員さんと逃げたという話です。

自分はほんやりと女店員の顔を見上げていた。

わたしはカナちゃん、よろしくね。

そういつて彼女は去つていく、やはり白い足が見えている。細い足である。

本当のことを知りたいと、なぜかまた思う。

会田翔太はどうしたのだらう、と連想が飛ぶ。だが翔太はこの店のユキちゃんのように、二人そろつて逃げるといふことはしなかつた。勇気がなかつたのか、翔太は自分だけが隠れることにしたのだ。その後の顛末を、自分はまだ時雄から聞いていない。しかし相手の女性を妊娠させてしまったことだけは事実のようである。

コーヒがあまりおいしくない、いつものコップのいつものコーヒーなのに、味が変わつてしまつたように感じられる。新しい喫茶店を探すのがいいだらうか。自分は、こんなことをしながらどこまで生きていくつもりなのか、だが考えることは、たつた一瞬のこの思いから一歩もすすまない。その問いに答えないうまま八十年を生きてきたのだ。なんと簡単なことだらう。

店の中は静かである。かすかに有線放送の音楽が鳴つて

いるのがわかる。けれどほとんど客には聞こえてはいないだろう。テレビは置かれてはいるが点けられたことはない。妻のかなえは上手に死んだのだと脈略もなく思う。だが風呂場で倒れた妻と、自分は二度と言葉を交わすことはできなかつた。たったひとことでもいい、結婚しておよそ五十年、ひたすら迷惑を掛けたのだ。お世話になりましたとか、ありがとうとか、感謝の言葉を伝えなかった、その声を受け止めてくれる時間がほしかった。

カナちゃんが大きな水差しをもって近づいてくる。彼女は黙って自分のコップに注ぎ足していく。

かなえはこの世のメッセージを残すことなく逝ってしまった。無念だったろうか、無念とも思ういとまがなかつただろう。生前かなえは、外に出ることをあまり好まなかつたように思う。

一人娘の加根子を育て、家の中のことを完璧にこなすことに拘っていた。この世に完璧なことなど一つもありはしないのに、料理、清掃、家事一切について、後ろ指をさされることを嫌った。そんななかで、ただ一つの趣味というのが水墨画を描くことだった。

駅前の文化館で絵画教室があるというので、買い物物の帰りに、そつと覗いたのははじまりだった。毎週その教室に通うようになり抜け出せなくなつた。けれども自分から見ればうまい絵とはとてもいえない、上達する気配もなかつた。

類の他に、田舎風の丸餅、白菜や大根などの野菜である。俺のところだけでは食べ切れないのだよ、と会田はいいながら家の中に運び入れてくれる。家には上がらないで少しドライブしないかという。

考えてみれば、自分が車を手放してからは歩いて（みやび）などの喫茶店に出掛けるぐらいのもので、ほとんど外出はままならない。自分で万引きを働いてからは、スーパーマーケットにも行きにくくなつてしまった。

簡単にスーツを羽織つて時雄の車の助手席に乗る。久しぶりのことだ。

どこまで連れて行ってくれるのか。

天国まで一緒だ、と時雄がしっかりと声でいう。

自分はまた天国という言葉聞いたのだ。自分はすでに天国に近いのだろうか、いや自分が死んだとき、閻魔様の前で、どんな言い訳が可能なのだろうか。自分は万引き犯である、けれども閻魔様を殺してでも地獄に行きたくない。

有一、お前何を考えている。

時雄が顔だけをこちらに向けて問うてくる。

車はすでに自分の街のはずれにかかつている。

どこのだれにお願いすれば、うまく死ぬことができるだろうか。

そんな呟きが声になって出ていったのだ。

た。だが先生が提示する素描画を真似て、一週間かけて書き上げていくのが唯一の楽しみの方だった。

かなえは家のなかの主婦の仕事をこなすばかりでは仕方がない、というように考え始めていたのではないか。機会を見つけて、そのことにどんな意味があるのかと問うてみたいと思っていたのだが、その場がこないうちに彼女は逝ってしまった。

奉仕するばかりの人間から、それを受け取る側の人間になりたい、ときどきはそんなことをいつていたと思う。いくら丁寧な家事をやり遂げても、ただそれだけのことである。何事かを自分の方から提示する者になりたい、そういうことだったろうか。それがかなえには水墨画だった。けれどももう、家内の絵を見ることはできない。色紙に茄子や鯛を書いた小品が、壁のあちこちに掛かっているが、そのままにしてある。まだしばらくは取りはずすつもりはない。

会田時雄から電話があつて、田舎から余計なものをいろいろ送ってきたので、持つて行くが、いいかというので、もらつてやるから持つてこいといった。時雄は午後になつて車でやつてきた。一人で乗り回すには大きな乗用車である。時雄の田舎から送ってきたというのは、正月用に作つたり用意したものなのだろうか。ケーキやお菓子を

何をわからないことをいつてるのか。——お前の家から、少しでも離れているだけでもいいじゃないか。きれいな喫茶店を見つかることにするよ。

そうか、といつて自分は黙つた。友だちというのはありがたいものだと思う。

健治がとうとう死んでしまつたつて聞いたよ。お前聞いていないか。

健治が死んだ、と自分は口の中で呟き返していた。健治というのは、時雄たちと一緒に遊んだ田舎の幼馴染みである。もう何年も前から認知症に掛かつて寝たり起きたりだということを知っていた。健治は天国に行けたのだろうか。時雄は運転がうまい。細い道も広い通りも緩急をつけた運転で危なげがない。

あそこに何かあるよ、と時雄がいつて車のスピードを緩める。前方に喫茶店らしいランプが点灯しているのが見える。広い駐車場だが、それでも車がいっぱい停まっている。そこをまるで自分の専用の駐車場であるかのように、時雄は空いたスペースに巧みに車を入れる。

大きな立て看板があつて（山のひびき）と書いてある。車の中からは、どこにも山は見えないのになんかどういふことだろうか。

ここでいいか、と会田がいう。

勿論、構わないよ。
時雄はきつと天国に行くのだろうと思う。もと警察官の彼は基本的に人にやさしい。そうしていまはビルの警備員である。

孫の翔太が不始末をすれば、彼にとっては心の支えを失うことになるのは間違いない。その翔太はどうしているだろう。

店の中に入る。明るくて広い店内である。部屋の隅々に装飾用の花が置かれている。

自分たちは内庭の見える窓際の位置に向き合って坐る。はじめてくる店である。

コーヒーを注文して、しばらく互いに無言で店内を見回している。

女性の客が多いのは店の雰囲気はどこか優しいからだろう。

きょうは何曜日だったかねと時雄がいう。
木曜日、と自分は、けさ早く家のゴミを出したことを思い出しながらいった。

窓越しに見えている中庭の花を見ている。赤や黄色の小さな花が育っている。けれどもどの花も名前を知らない。うちの家内は、きつとこんな店を持ちたかったのだと思うよ。

時雄も庭を見ながら呟いている。

奥さんは元気なんだろう。

まあ元気だ、と時雄が顔をあげていう。

けれどもいつまで元気な夫婦でいられるか、そんなことが気に掛かって仕方がない。

そういつて時雄はまた庭の方に視線を向ける。

自分はどのようにこたえればいいか。どんな言葉も許さず、どんな言葉も無意味に思える。

翔太は元気なのか、と自分はどうでもいいことを口にする。

翔太は結局、家から出ていったよ。都合よくいえば自立したということだが、例の彼女と小さなアパートを借りて同棲を始めたらしい。

まだ二人とも学生じゃなかったのか。

そうだよ、大学生のままで二人でアルバイトをして、頑張るといのがあいつらの言い分なんだ。

それでお前、寂しくはないか。

女房の方がきつと寂しいのだと思う。

喫茶店の中庭にきつと吹き降ろしてくるような風が吹いて、白い花がなびくのが見えた。

駅前ビルの電気系統の点検のために、娘が勤める総菜屋も俄かの休日になった。

お父さん、お昼はどうするの、と娘が心配してくれている。

いまからでも遅くはないだろう。

いや、もうお互い歳なんだよ。

ホームセンターで切り花の束を万引きしたとき、自分は何を考えていただろう。もしかすると、もうこの世とお別れをしてもいいとでも思っていたのだろうか、そんな気がする。

しかし反対に、死なないというのも、案外苦しいことかもしれないね。

また時雄が突拍子もないことをいつている。いつもの時雄と違って、どこか沈んだ調子の声である。

自分にはこたえる準備がないので黙っている。そのうち、時雄自身でこたえを見つけてくれるだろう。

俺たちはいつまで生きるのか。

死ぬまでだよ、と即答する。

そうか、と時雄はいつて黙る。

なんだ、お前は何を考えているのか、と自分は続けていつた。

いや、その反対だよ、俺はいつまでも生きていたい、と思っているらしい、このまま二十年でも三十年でも生きていのに体がついていかないようだ。

正直な感想ではないか、と自分はいう。

大きなカップでコーヒーを飲む。小さな皿にピーナッツが入っている。

加根子の定休日は木曜日に決まっているが、休日はおおかた家にはない。習いごとに出ていくか、友だちとのショッピングか、それでも暇のあるときはカメラをもって散策に行く。休日に自分と一緒に過ごしたことはないのだった。

俄かの休日で、娘もこの日の行き場を失ったのかもしれない。

都合のいいようにしてくれていいよ。

自分のいつもの昼食は簡単なものだ。食パンかインスタントのラーメンか。いまは便利なものがあって、インスタントのチャーハンというのも案外と旨いのだ。しかし娘が何か作ってくればご馳走なのである。

パソコンで詰碁を楽しんでいるときに、階下にいる娘に呼ばれた。彼女が作ったのはスパゲッティだった。久しぶりに、手作りの昼食をいただく。

お父さん、話があるんだけど。

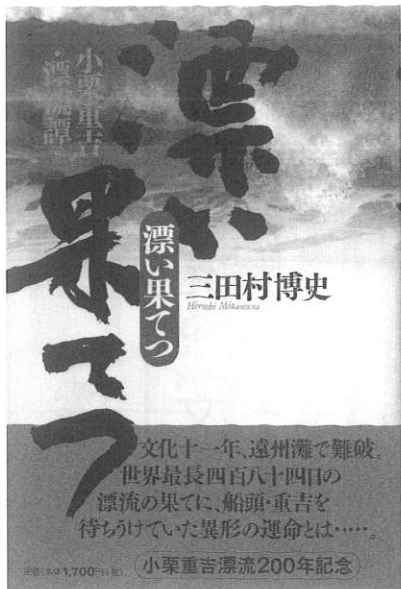
自分の前に坐っている加根子が、食事の手を休めている。何だ、と自分もまた手を止めて問い返す。

お父さん、わたしが結婚するといったらどうするの。

スパゲッティの味について聞いているような、こだわりのない口調だった。

自分は娘の顔を見ていた。ただそれだけで、返す言葉が思いつかない。

自分は椅子から立って流し台の前までいく、自分のコッ



堀井 清
ほりい きよし

1936年生まれ
江夏美好氏主宰の「東海文学」に創刊時から参加、その後現在の「文芸中部」の編集同人「中部ペンクラブ」に設立時から会員・現在理事
1983年3月号「文学界」に「光のいれもの」が同人雑誌優秀作として転載
1998年第11回・中部ペンクラブ文学賞に「さよならの年月」が受賞
岐阜県多治見市在住



中部ペン／諏訪哲史氏を招いてのシンポジウム

文芸中部

106



〔「文芸中部」106号より転載〕

プに水をいっぱい汲んで運んでくる。自分の家では、食事に茶を淹れるという習慣がないのである。いい話じゃないか。水を一口飲んでからこたえる。どこがいい話なのよ。どうしたんだ。お父さん、わたしの歳、わかってるの。娘の年齢を、これまで自分は考えてみたことがなかった。わたし、五十。そうだったな、と自分で自分は黙った。お父さんは八十、わたしは五十、歳をとっていくのは止められないわ。だから、これからはわたし、好きなようにさせていただくの、いいわね。どうしたんだ、とまた自分は呟いていた。だが続く自分の言葉は自分のなかで足りないのがわかる。平穩だった日常がゆっくりと転覆していくのがわかる。自分は娘の真意を読み取るうと、その顔をほんやりと見ている。食事を終えて少ない食器を流し台に運んでいく、その後姿を見ていた。自分のスパゲッティは、まだ皿のなかに残っている。大丈夫よ、まだ今日、明日、いなくなるわけでもないから。そうか、と自分は呟いているが、娘が結婚するというの

はどういうことなのかわかってこない。でもお父さん、一人で生きていけるの、きょうから一人で生きていく訓練する？ 自分の心臓が、理由が曖昧なままに早鐘のように打っているのがわかる。きょうの夕ご飯、お父さん作ってくれる。わたしの分をふくめて二人分よ。お願いね。娘はそうやってリビングから出て行く。自分は途方に暮れている、考えてみたことのない課題なのだった。娘は夜叉に変貌したのかもしれない。

文芸中部

愛知県

一一〇号を迎える「文芸中部」

中堅女流作家に授与の田村俊子賞（第一回受賞は瀬戸内寂聴さん）を「下々の女」で受賞した江夏美好さん、この人を中心に昭和三十四（一九五九）年九月に創刊されたのが「東海文学」です。季刊を守りとおし八〇号で昭和五十六（一九八二）年十一月終刊しました。同人雑誌花盛りの時期でもありましたね。終刊を惜しむ残党どもが直木賞候補にもなった井上武彦さんを中心に翌昭和五十七（一九八二）年四月「文芸中部」を立ち上げました。以来三十六年、こちらは年三回の発行でこの十一月には一〇九号を発行、来春、一一〇号を迎えます。

「東海文学」は主宰の江夏さんがすべてを取り仕切っておられました。が、「文芸中部」は創刊時まだ現役の者が多く時間的にも余裕のある人がいませんでした。そこで各号の責任編集者を決め、その人が原稿を集め、名古屋市内のホテルに編集委員全員集まって編集する、ゲラ校正にも集まり、同時に文学的談議もしました。ですからこれらの人は合評会も含め年九回は顔を合わせていたのですが、新たに参加した人にとっては年三回だけの合評会ではもの足

りないでしょう。そこで七月発行の号の合評会は合宿ということにしました。同時に読書会もという計画を加えたのは十年ほど前でしょうか。レポーターも決め「高野聖」、「カラマゾフの兄弟」、「八月の光」、「スプートニクの恋人」、「ライ麦畑でつかまえて」、「孤愁の岸」など、今年には長塚節の「土」を読み合いました。合宿ですから各地へ行きました。榊原温泉、志摩、高山、郡上八幡、蒲郡、答志島、岐阜、伊賀、そして今年には美濃市。前日、合評会と読書会でしっかり勉強した後は税（うだつ）の街をボランティアの案内でまわりました。

同人雑誌だけで凝り固まっているのは嫌ですから「小説を創る」というシンポジウムを開いて諏訪哲史氏を招いたり、亀山郁夫、吉村萬壺の各氏も十一月発行号の合評会は年末になりますので忘年会に来ていただき貴重なお話も聞きました。五十嵐勉氏が来てくださったのは郡上八幡の合宿の時でした。

小説教室出身の女性たちが加わってこのところ新しい息吹を「文芸中部」に与えてきています。またこれまで何年も別の読書会で文学研究していた人も小説書きに挑みたいと参加してくれました。これらの人なくしては「文芸中部」もマンネリ化していたでしょう。稀に新聞を見て参加する人もいますが、この人たちが同化するには時間がかかりそうです。

今のところまあまあ順調に定期刊行していますが、五年先は。いや心配することもないでしょう。先にも書きましたが「文芸中部」は各号責任編集制をとっています。現在は朝岡明美、堀井清、名村和実、本興寺更、三田村博史が順ぐりに各自それぞれ原稿集めから編集と責任編集しています。初校だけ筆者に送付、二校以後は責任者が校正し、出来上がったらわたしのもとに届き発送する。号によって原稿の集まり具合に多寡のちがいはありますが、平均すると百五十ページほどです。

評論が少ないですが、小説を書くこと自体が現代文学への挑戦、そういう作品を各自目指していると思います。最近名前だけの同人を整理しましたので現在、実質活動している同人は十九人、会員一人。同人費月一五〇〇円、会員費五〇〇円、掲載負担金はページ七〇〇円です。印刷は創刊当時から刑務所へ頼んでいます。

前記の責任編集者は全員、ほかに現同人では福富奈津子、西澤しのぶ、北川朱実、堀江光雄といった個性的な作品を書く人が中部ペンクラブ文学賞を受賞、そして「文芸思潮」主催の全国同人雑誌賞（現まほろば賞）の第一回の最優秀賞は名村和実さんでした。その後、北川朱実、朝岡明美さんも優秀賞を受けています。雑誌としては富士正晴全国同人雑誌賞特別賞を二度受賞しました。

同人雑誌は長く続けたいというものでもないでしょ

う。一方、「継続は力なり」ともいいます。惰性に流されず、時代に向き合いながら常に書き手にとって新鮮であり冒険である作品を創っていく、そんな姿勢を持ちつづける「文芸中部」を発行したいと思っています。

（文責／三田村博史）



「文芸中部」今季夏期合宿美濃市

文芸中部 〒477-0032

愛知県東海市加太屋町泡池十一-三二八

文芸中部の会

電話 0562-34-4522

アフリカの弦

寺井順一

1

修了生を送り出したあとの研修施設には、どこか間の抜けた寂しさがある。昨日もモザンビークの陽気な若者たちが帰国してしまい、スピーチコンテストの採点結果を綴じこみながら、久保木修平はため息をもらした。

彼はこれまで三度の海外経験を経て、今は、国内外の職員の研究事務に携わりながら次の飛躍の機会をうかがっている。

「修平さんは、まだアフリカを希望ですか？ あつちはこれから長い雨季になりますね」

そう声をかけてきたのは庶務係長の長澤だった。彼も腰

掛職員であることには変わりはない。

「そうだな。現地の子供たちの人なつつこい笑顔に引かれるんだ。瞳が、大きくて綺麗でさ」

「でも、あれはヤバかったんでしょ？ スーダンで反政府組織に捕まったときは」

修平は、長澤のかすれた声が聞こえなかったふりをして、窓の外に立ち並ぶ灰色のビル群に目をやった。それから、マグカップの側面を這う蠅に息を吹きかけ、頭をもたげようとすると忌まわしい記憶を振り払った。

地球規模で事業展開する総合商社には実に雑多な部署があり、資源開発のために命がけて危険エリアに乗りこむチ

疑問を感じることはなかった。要は自らの活動を「草の根」と呼びつつも、実際には根無し草の集まりだった。

研修所長からの食事の誘いは珍しいことではなかったが、その日は夕刻にわざわざ確認の電話が入り、よほど重要な用件がある様子だった

所長の浦谷はたくわえた顎ひげに手をやりながら、修平を上目遣いに見ている。多少弱気なところがあるせいで、彼の方からどう話したものと迷ったときの仕草だ。職員食堂のテーブルにオードブルが出されたところで、浦谷はこう切りだした。

「江島君のことだが、相変わらずナイジェリアからの帰国を拒んでいる。精神的にまいっているらしい。様子を見ていってくれないか」

「どうして私なんです」

「むこうで、君と同じ目にあつた訳だ。心のケアをしてやって欲しい。君たちの間柄は事業本部長も知っている」

修平は、ナイジェリアから重優あゆを連れ帰る話が、幹部の間では既定の方針になっていることを知った。

「すぐに出張ということですね？」

浦谷は頷いたその顔で、修平に懇願する表情になった。

江島重優は、修平と八歳離れた後輩だった。

ームもあれば、人事、研修といった足慣らしのための持ち場もある。だが、生き馬の目を抜く海外事業部門に身を置いている以上、そんな好き嫌いを言っている暇などない。一人一人が多かれ少なかれ最前線の熱気を肌で感じる兵隊たちなのだ。

「さつき、所長の新任秘書から修平さんに電話がありましたよ。デートですか？」

「ばか言え。彼女、子持ちだぞ」

もうすぐ四十に手がかかる修平の年齢では、海外勤務も最後のチャンスだと覚悟ができている。一方、結婚についてからかい半分に急かされることには慣れてしまった。

長身で肩幅が広く一見強面だが、接してみるとソフトでユーモアがあり、男女を問わず若手から慕われる存在だ。ただ、久しく独り身でいることがどこか謎めいていて、かつては婚期が近づいた女子社員たちにとって親密な付き合いを躊躇う理由になっていた。

この商社、特に海外事業部は、恋愛感情を育む余裕がないほど人の出入りが激しいことで知られている。昨日まで隣に座っていた石油探掘エンジニアが、翌日にはブラジル転勤の挨拶回りをしていた。赴任する大陸がどこか、何年過ごすことになるかを知らされると同時に研修が始まり、現地語と生活習慣を短期間で叩きこまれた。そして、そうしたハムスターホイールのような目まぐるしさに、だれも

会社の創立九十周年の記念イベントを修平たちが任せられたことがあり、その時彼のアシスタント役に抜擢されたのが、採用三年目の亜優だった。

父親が電子機器メーカーのアメリカ駐在員だったので、彼女は帰国子女として大学に進みこの道を選んだ優等生だった。しかも、初任地のインドで役所回りの通訳を担当して成果をあげ、帰国後は事業本部で半年のキャリア形成期間を過ごした後、研修所の企画係に配属された。修平にとっては、事務処理能力の高い部下を得たことで、そのイベントを成功裏に終わらせることができた。亜優はいわば陰の立役者だった。

記念イベントの後始末が一段落したところで、修平は同僚や部下を誘って研修所の中庭でパーベキューパーティーを開いた。二か月近い集中作業から解放され、十数名の若い男女はひたすら食べ、飲んで騒いだ。海外の赴任先での話になると、全員が車座になって夜遅くまで一人ずつ体験談の披露が続いた。

門限が迫り、宿泊棟に数名ずつが姿を消してゆくなかで、後片づけの女子職員と火の元の責任者である修平が残った。彼らは洗い場まで往復し、ブイヤベースの鍋やリキュールの瓶を空にしていた。最後に修平が倉庫の鍵を締め、常夜灯に照らされた桜並木を歩いていると、大粒の雨にわか雨が降ってきた。久しぶりの雨に、彼は夜空を仰いで目を閉

じた。すると、背後から声がかかった。

「先輩、そんな濡れ方をすると、風邪ひきますよ」

登山帽をかぶった亜優だった。修平は手にしていた木炭の袋を頭上にかざした。すると、亜優が彼の胸に飛び込んできた。焼酎を生でおおったせいもあつたが、修平は、亜優の二十代前半の清新な色香のよくなものにくらくらと頭が揺れた。やがて、どちらからともなくしつかりと体を寄せ合っていた。

二人はすぐに親密になったわけではないが、その日を境にお互いを意識し合うようになった。やがて会話も増え、それが身内の話にも及ぶようになった。

亜優の母は彼女の海外勤務に反対した。アメリカでの暮らしに溶け込めなかった経験を引きずっていたからだだった。しかも、娘が国内勤務枠で採用されたとき、赴任地が決まった後も叔母を味方につけて説得しようとしたことが気に入らなかつたのだ。インドからの帰国後は、ほとんど諍いの日々が続き、亜優は実家に顔を出さなくなつた。しかし、彼女が幼い頃からピアノの手ほどきをしてくれ、クラシック音楽の趣味の領域を広げてくれるなど、本当は愛してやまない母親だった。結局、亜優は父親に泣きついて、母に詫言を入れた。両親が出した条件が、父親の定年退職までは国内勤務を希望する、というものだった。結局彼女はそれに従つた。

修平と亜優の関係は、やがて研修所内でも公然の秘密となった。歳の差を越えて久々にカップルが誕生か、とまで噂された。

その江島亜優が、通訳補充ということで急遽ナイジェリアの首都アブジャに派遣された。英語を公用語とするこの国で、日本人技術者の指示を現地人に正確に伝えるためだった。そして、赴任から半年もたないうちに、アブジャから遠く離れた仕事先で反政府ゲリラの襲撃を受けた。本人は軽い傷を負つたことだったが、子供を含む複数の市民や軍人が犠牲になったことは現地で大きく報じられた。修平は現地事務所にたびたびメールを送つたが、亜優は静養中とのことで、詳しい様子は分からなかつた。少ない駐在員のだれもが忙しく働いているなかで、それ以上の無理を言うわけにはゆかなかつた。いっそ、モザンビークの連中に紛れてアフリカに渡ってしまおうか、などと冗談半分に考えていたところだった。

2

ナイジェリアは、アフリカ大陸を頭蓋にたとえると大きく突き出た後頭部に位置し、南側は大西洋に面している。そして、そのことよって国際交流が促され、アフリカの主要な経済大国となった。ただし、他の新興国と同様に暴

力組織や詐欺集団がはびこる暗黒の部分を抱えているうえ、北東部では反政府組織による地域住民への襲撃が頻発していた。修平が十二年前に初めてアフリカに渡つた国はスーダンだった。

研修で各国の治安や経済情勢、国民性や部族構成についての基礎知識をもつて乗り込んだはずだったが、それらは皿に盛られた雑多な料理の一部でしかなかつた。少なくとも、政府を形成する公共部門は国民やツーリストの味方なのだという思い込みは通用しなかつた。首都ハルツームの警察官は、修平たちが若くて腕つぶしの強そうな男たちに金品をせがまれている様子を、見て見ぬふりをした。押しなべて彼らは、公僕としての義務を果たす意気込みに欠けていた。

ロンドン経由のフライトでナイジェリアの旧首都ラゴスに着いたこの日も、修平はモハンマド国際空港の近くで一度、昼食会場で現地職員と別れてから二度、警察官の検問に引っかけた。

アフリカのどこの国でも末端の役人たちの腐敗は珍しくなかつた。特に警察官は居丈高な分だけ始末が悪かつた。まっとうな理屈が通用せず、日本人の譲歩、つまり金品を目当てに会話を長引かせた。ここでも、彼らは何のための

足止めなのかを説明しようとしな。先の見通しが立たなくなることへのジレンマに負けて、修平はホテルの夕食代に匹敵する現地通貨を警官の一人に渡した。

もつと厄介だったのが、予約していたホテルが急に満室になったと告げられた時だった。軍の幹部が一族を連れて宿泊を申し入れたとのことで、修平はスリや強盗が徘徊する夜の街に放り出されるはめになった。

三十年以上も前からこの国ではクーデターが相次ぎ、民生は混乱していた。旧首都のラゴスにスラム街が増殖したのもそのためで、住宅や衣服、仕事などあらゆる面で富裕層との隔絶があらわだった。修平はオフィス街の灯りを頼りに、恐怖に近い思いを抱きながらその日の宿を探さなければならなかった。それにしても、亜優は新首都のアブジヤを離れて、なぜラゴスで一人住まいをしているのか。彼は街角に立つアフリカ娘たちを横目に、明るい方へと逃げるように歩いた。

やっと見つけたビジネスホテルは歓楽街のはずれにあった。

深夜まで男女の歌声が響き、時折けたたましい笑い声が混じった。音楽好きで陽気な国民性は日本人との相性はいはずだった。修平は、寝心地の悪いベッドから何度も起き上がり、薄い光が差し始めた窓辺に目をやりながらイギリス製の炭酸水に手を伸ばした。

的に、民間企業のオフィスや官庁、大学や競技施設はアフリカの最先端をゆく外観と設備をそなえている。どこに行っても昼間は人や車の往来が激しい。発音の聴きづらさはあるものの、イギリス統治時代のお蔭で多くの国民が英語を話せ、日常会話の面ではまったく不自由がない。タクシーの運転手はそこそこ親切で、「夜は出歩くな、警察官には逆らうな」と注意してくれる。料金は交渉次第なので、そこで採めなければ問題は無い。

修平は、そんなタクシーをヤバ地区の大学街で止めた。学生たちのための安アパートの一室に亜優が暮らし始めたという情報を得ていたからだだった。

褐色の球体のような中年女性が親切に道を教えてくれ、古い住宅街の路地をいくつも曲がって目的の建物にたどり着いた。旧イギリス統治下のコロニアル様式らしく、古びた枠組みの出窓にはちよつとした風情がある。

大家は道案内の女性とは違って細身で小柄な老婆だった。基本的にはチップは不要な国だが、彼女に手渡した多めの現地通貨のお蔭で、亜優の部屋に手際よく案内してもらえた。

3

亜優はたった今髪を洗い終えたばかりだという恰好で、

ナイジェリアの南西部に位置するラゴスには、長い雨季が二度訪れる。四月から七月にかけては、激しく執拗な雨を覚悟しなければならぬ。月の半分が雨にとざされ、月々の気温は一度ずつ下がってゆく。日本の梅雨と違って蒸し暑さはさほど感じない。

亜優の足取りはこの国の北東部から南西部まで、千二百キロにおよぶものだった。彼女は国の中心部に位置するアブジヤに通訳として赴任したが、仕事がらみの何かの理由で北東部のボナ州に出向いたらしい。そして、『国境なき医師団』のメンバーと行動をとるうちに、反政府ゲリラから何らかの危害を加えられたとされる。

東京の本社が入手できた情報では、軍事衝突の二日後に政府軍によって解放された外国人グループのなかに亜優がおり、彼女はアブジヤに帰還した後、しばらく地元の病院に入院していたらしい。しかし、独りで歩行が可能になるとすぐに退院し、ラゴスに移り住んでいるという。会社には病気休暇の申請が届いていた。彼女のその後については、現地事務所の日本人スタッフからの情報も曖昧で、修平にとつては、とにかく本人に会って詳しい話を聴き出すしかなかった。

ラゴスはいくつもの顔をもつ大都会であり、ブラック造りの屋根がひしめくスラム街がある一方で、それとは対照的

に、民間企業のオフィスや官庁、大学や競技施設はアフリカの最先端をゆく外観と設備をそなえている。どこに行っても昼間は人や車の往来が激しい。発音の聴きづらさはあるものの、イギリス統治時代のお蔭で多くの国民が英語を話せ、日常会話の面ではまったく不自由がない。タクシーの運転手はそこそこ親切で、「夜は出歩くな、警察官には逆らうな」と注意してくれる。料金は交渉次第なので、そこで採めなければ問題は無い。

「とにかく無事でよかった」

二人はキッチン小さな丸テーブルまで、久しぶりに寄り添って歩いた。それからは、マホガニーの椅子に座って互いを確認するように見つめ合った。

「頬がひどく瘦せたね」

「久保木さんにまで、ご心配をおかけしました」

バスタオルをそそくさと外して、亜優は濡れた頭を深々と下げた。

「ボナ州はこの国の東のはずれじゃないか。何であんな所まで……」

修平の問いにわざと顔をそらした亜優は、キッチンに立って湯を沸かし始めた。奥の広間には大家の孫のものだというピアノが置かれ、その先はラゴスのくすんだ夕暮れを縁どる大きな木製の窓だった。

「いいコーヒー豆が手に入ったんです。ここの大家さん、ああ見えても農場のオーナーの奥さんなんですよ」

「君のご両親に会って来た」

「何か言っていましたか？」
 「とにかく命に別状がなかったことを喜んでおられた。ちやんと食べて、好きな音楽でも聴いて、心身ともに回復するよう毎日祈っているぞうだ。君のお母さん、泣いてたぞ」

そこで亜優は大きく肩を落とした。

「私って、どこまでも親不幸ですね」

「仕事がらみだったんだ。自分を責めても仕方がない」

修平の労りの言葉に、亜優はかえって堪えられなくなり、両手で顔をおおった。

ケトルが音をたて始めた。泡になった湯が古い塗り壁を責め立てるように濡らしている。

「捕まっている時に、日本の中学生くらいの男の子が何度も銃を向けてきたんです。この国では、子供たちが戦闘に加わっている。彼らを操る大人たちはまるで邪悪なモンスターです」

亜優は、どう説明したらいいかわからないという表情をした。そして、初めて気がついたように日本製の電熱器を止めた。

「短い間に色々なことが起こって、私はパニックになってしまつて。アブジャでの普通の生活からボナ州での人道支援に加わるまで、そしてその後も、悪夢のような時間でした」

そこからは、闇のなかの記憶を手探りするように、ぼつりぼつりと話し始めた。

亜優はラゴスでの発電事業のため、日本人技術者の指示を現地人に詳しくレクチャーする仕事をしていた。複数の部族民からなるこの国では、英語にさえ不慣れな一団が必ずいて、彼らの機嫌を損ねないように根気強く接する日々が繰り返された。

そんな時に、《国境なき医師団》のスタッフから緊急の協力要請が入った。ボナ州で日本人を含む四人の看護師が反政府ゲリラに拉致され、政府軍の指揮官たちに援助活動の背景や現状を説明する要員が足りないのだという。ナイジェリアの北東部は危険地帯として知られ、そもそも海外の企業が触手を伸ばす場所ではなかった。

一方、《国境なき医師団》は、武力衝突や伝染病、栄養失調といった様々な死にいたる危機に瀕した人々に医療援助を行ってきた。彼らは医師、看護師、検査技師、物資調達担当者、メンタルヘルスの専門家などからなり、そのうちの約一割が欧米人や日本人を始めとする外国人スタッフだった。

会社としては、現地政府との友好関係を築いておく必要がある、国際的に認知された《国境なき医師団》の活動には同調する姿勢を示していた。実際に寄付の額は他国の企

業よりも多く、それらは今でも、貧困世帯の幼児を中心に食事や医療の提供のために使われている。

亜優もそうした人道支援に関わる窓口的な事務手続きを何度か手伝っており、ヨーロッパ出身の医師たちとは面識があった。彼女は現地事務所準備を済ませ、早速ワゴン車に乗って乾燥地帯のボナ州へと向かった。

ボナ州は、生活、文化、経済のあらゆる面でアブジャに比べて著しく劣っていた。州の中心部をはずれるとほとんどの世帯がいまだに樹木を燃料に調理をしており、亜優が身を寄せることになった農家も粗いレンガを積み重ねただけの家畜小屋を思わせる造りだった。住民である家族たちの怯えた眼差しからは、迫害を受けてきた民族に共通の悲しみと諦めが感じられたという。

看護師たちの不運は、何といつてもこの時期に過激な反政府組織の脅威がピークに達しつつあったことだった。

今に始まったことではないが、アフリカでは民族対立と宗教対立が政府の枠を超えて様々な紛争を生み、多くの軍人と民間人が加害者となり被害者となってきた。《国境なき医師団》の役割の一つが、そうした紛争の犠牲となった子供たちへの医療の提供だった。亜優も普段からそうした話を耳にしており、正義感に似た気持ちがあったのだ。人質解放の交渉は反政府ゲリラの幹部たちと行われ、相手側の要求は《国境なき医師団》のボナ州からの完全な退

去だった。人道的支援の実態はメディアを通じて国際的に発信されており、町や村を次々と破壊してきた反政府勢力にとつては不都合で危惧すべき問題だったのだ。

四人の看護師は「国境なき医師団」を表すMSFのロゴ入りの揃いのシャツを着て、州政府の医療センターの前に立っていた。

ゲリラ側の見張り役の少年は、四人に銃口を示して身動きを封じていた。建物からは同じように囚われの身となった村の女性と子供、政府軍兵士たちが両手を挙げてぞろぞろと出てきた。そこへ、何の前触れもなく大型トラックが乗りつけ、迷彩服をきたゲリラ兵たちが幌のなかから姿を現した。

「彼らとの間は二十メートルも離れていませんでした。私はまったく事情が分からないままに、政府軍の幹部たちと一緒にその場を逃げ出しました。そのあとです、反政府ゲリラが住民と兵士を殺害したのは、私も流れ弾が右肩をかすめて、しばらく気を失っていました。その後は、まる二日の間、どこか地下室のような所に閉じ込められていたんです」

亜優の話はそこまでだった。

彼女はタオルで額の汗を拭いながらふらふらと立ち上がり、再び電熱器のスイッチを押した。それから、コーヒー

豆の袋を戸棚から引きずり下ろした。

「君とアフリカの人権問題と、どう関わっているんだ。事務所も一体何を考えているんだらう。君は短期の通訳要員だというのに」

「私、ちゃんと仕事をしたつもりです。《国境なき医師団》への協力は、或る意味で業務命令でした。修平さんこそ、スーダンで反政府組織に捕まったじゃないですか」

「だから、俺たち商社の人間が首をつっこむ問題じゃないと言ってるんだ。それこそ《国境なき医師団》や国連に任せておけばいい。ここは、地方の役人たちがワクチンの代わりに水を注射させている恐ろしい国だぞ」

その時、修平の頭のなかは自分でも訝しくなるほど混乱していた。ワクチンの話は同僚から聴いたものだったが、実際に住民たちの病気への不安を薄めるために行われているらしい。ただ、その話が重優に対する説得になつていないことが苛立たしかった。彼は顔面に痺れを感じた。

重優は、修平の言葉が信じられないというように彼を見つめていた。二人が過ぎてきた歳月のなかで、彼女にとってこれほど無気力で意味のない言葉を耳にするのは初めてだった。

4

では外国人メンパーが現地国もしくは各国の間で頻繁に移動と交代を繰り返して、新しい情報の共有や人材確保が十分になされていらないように思えた。修平自身も、会社組織の拡張とともに内部の階層化や意見対立が生じやすいことを経験済みだった。

また、会社の現地事務所には現地人以外の外国人がおり、彼らとの軋轢が生じないようにうまく付き合わなければならなかった。例えば中国人スタッフの楊敏は、ときどき真顔でからかってきた。

「久保木さん、あなたは人にこびることを覚えなさい。高潔すぎる、眩しすぎる。むかつくよ」

その遠慮のない物言いには、心のどこかに笑顔をのぞかせた特有の温かさがあつた。アジアの友人だからこそその助言だと、修平は秘かに感謝していた。

そして、そんな楊との出張中に、事件が起こった。灌漑工専用の資材を運ぶトラックが反政府ゲリラの襲撃にあつたのだ。修平と楊が乗った伴走のジープは、ハンドルの切り損ねて転倒し、砂漠の窪みにはまり込んでしまった。修平の体は車体の下敷きになり、彼の意識は次第に薄れていった。

気がつくくとトラックはなく、運転手が血まみれで倒れているのが見えた。楊たちを探したが、連れ去られたのか姿が見えなかった。

修平は十二年前の出来事を思い起こしていた。

スーダンはエジプトの真南にあり、ナイル川で結ばれているだけに日本企業との繋がりが深い。エジプトの灌漑工事には日本の技術とたくさんマンパワーが投じられており、周辺国でも高い評価を得ていた。修平が赴任したハルツームの事務所には、日本人を含む六人のアジア系技術者と十数人の現地人スタッフがおり、二年半の工期で大規模な農業用施設を建設していた。

スーダン西部では反政府ゲリラによる内紛が続き、子供や乳幼児までもが必要な医療を受けることができない状況だった。さらに、《国境なき医師団》が運営する病院が政府軍に空爆されるといふ事件が起き、病院を追われた人々はもとより、紛争からの避難が長びいて自宅にもどれない住民が多数にのぼった。

特に、親を殺害された子供たちが目に見えて数を増していた。恐怖と空腹のために廃墟となつた建物の陰に座り込んでいる彼らの姿は、修平をいたたまれない思いにさせた。混乱を生じさせようとしてあえて医療現場を標的にする紛争当事者たちへの怒りを、彼はその時胸に刻み込んだのだ。

修平たちは、スーダンの西部地方の視察を通じて、《国境なき医師団》の現地職員と直に接していた。修平の印象

窪地の砂を掘って車体から抜け出すまでに長い時間がかかった。トラックの運転手がすでに息絶えているのを確かめてから、修平はもと来た道をとほと引き返した。膝と腰の痛みには何とか堪えられた。そのうちに激しい喉の渇きを覚え、道路をはずれた赤い岩場の方に近づいて行った。水の臭いがしたからだった。

しかし、結局辺りは一面の乾いた大地だった。砂漠の中央部は陽炎のように揺れていた。その手前に見える二つの蟻塚がゲリラの拠点のように思えてきて、彼はがっくりと肩を落とした。

気がつくくと、日本では見たことのない大きな黒褐色の鳥が修平の様子をうかがっている。ガラス玉のような眼球が鋭い光を放ち、首を動かすたびにギシギシという錆びた蝶番のような音をさせた。他者を見くだしたような顔つきは、現地の役人の一人に似ていた。そんな無意味なことを考えているうちに、鳥は羽ばたいて去っていった。後には濃い血の臭いを孕んだ不快な空気だけが残った。

いつの間にか、頭のなかに一定のリズムが刻まれてゆく。タム、タム、タタン、タム、タム、タム、タム、タタン。打楽器の単調な乾いた音色が続いた。アフリカ音楽独特の軽快さ。修平が手の内に入れたと思ひ込んでいたそのリズムは、奥深くしたたかたか、日本人の彼をどこか根底で拒絶するものだった。タム、タム、タタン、タム、タム、

タム、タム、タターン。修平は違和感の理由をぼんやり考
えながら、底なしの闇のなかに引き込まれていった。

修平は一人薄暗い室内に放置されていた。

意識が朦朧としているうえに、後ろ手に結わえられた口
ブが手首に食い込んで身動きができなかった。目の前の
土壁にはライフル銃が無造作に吊り下げられ、葉莖きょうの空箱
が辺り一面に散らばっている。

脱出の手立てを見つけ出そうとしたが、すぐには考えが
まとまらなかった。彼は心を落ち着かせることに専念した。
そのうちに、所在を知らせる小型発信機をもたされてい
たことを思い出した。ズボンの後ろポケットに入っており、
赤いボタンを押せば政府軍が探しに来る仕組みになってい
る。彼は尻を浮かせて、ポケットの中身を床に落とそうと
した。

その時、ドアが開き、一人の少年と数名のゲリラ兵と思
われる男たちが踏み込んできた。彼らの後からは、痩せこ
けた中年女性が引きずられるようにして顔を出した。少年
の顔つきから彼女が母親であることはすぐに分かった。

覆面を被った大男が少年に何か語りかけている。やがて
その声は雷鳴のように威力を増し、部屋中にとどろいた。
とうとう少年は床に泣き崩れた。大男は足先で少年の尻を
つついた。そして、今度は女の頭部に銃口を向けた。少年

と、力をこめてボタンを押した。

かなりの時間がたった。修平を助けにやって来たの
は、無事な姿の楊と数名の政府軍兵士だった。修平はこれ
で助かったのだと思うと、楊の赤ら顔が輝いて見え、涙さ
え滲んできた。

「怪我はないか？ こっちは、資材を降ろしたところで見
逃してくれた」

「ひどいことをしやがる」

修平は吐き捨てるように言った。楊はサバイバルナイフ
でロープを切り裂き、彼を助け起こした。

「そもそも、どうかしている」
修平は痛みの残った足腰に手を当てると、怒りをおさえ
きれずに床を蹴って歩き回った。そして、死霊のように蘇
ってくる記憶に顔をゆがめた。

楊は修平の様子を嘔然とした表情でながめていたが、床
に転がった血まみれの片腕を気味悪そうに見てから、生臭
い空気に堪えかねたように表の方へと駆け出していった。
そして、緑色の大きな救援袋とベクトポトルを抱えてもど
って来た。

惨劇の部屋を出ると、居間らしき広い空間があった。窓
から差し込む光線の束が全身を被った。

数分の空白を強烈な太陽が黄金色に変えた。修平はソフ
ァーに深々と体を沈め、目を閉じたまま唸り声をあげた。

は、それを思いとどませようと男に向かって何かを叫ん
だ。

やがて、少年は立ち上がり、銃口を母親の二の腕の辺り
に向けた。しかし、体ごとわなわなと震え、次の動作に移
ろうとしなかった。大男は苛立ち、少年の首根っこを押さ
えた。今度は甲高い声で威嚇した。少年は二歩後ずさりし
てから、引き金を引いた。

辺りに白煙が立ち込め、衝撃でのけぞった少年の目の前
には右腕の関節から先を吹き飛ばされた母親が横たわって
いた。血潮は雨季の湖面のように溢れながら広がってつい
た。

大男は満足げな高笑いで事態を締めくくった。これで、
少年は彼の家族や隣人を敵に回し、反政府軍の新たなファ
ミリーになるからだだった。

かつて楊から聴いたが、こうした方法で彼らは若い職闘
員を増やし組織を維持してきたのだという。あまりにも非
道で残酷な行いを目の当たりにして、修平は愕然となった。
ゲリラ兵は少年を軽々と肩に抱え、獲物を得た猟師のよ
うに出て行った。少年の母親は痛みのために繰り返し悲鳴
をあげ、紅い血の帯を残しながら布袋のように引きずられ
ていった。

修平は兵士たちの姿が見えなくなってから、何度も試み
て尻のポケットの発信機を床に落とした。さらに掌に収め

目の前に立っている相手が楊なのかどうか、修平にははば
らく分からなかった。

「君が言っていたとおり、卑劣な奴らだ」

しばらくして、修平が洩らした言葉に、相手は大きく頷
いた。

5

まるで雨季が緩慢な前奏曲の終わりを忘れたかのような、
鬱屈とした毎日だった。ラゴスの空はどんより曇り、湿っ
た空気は発酵する間際の独特の臭いをさせ、鼻の奥をくす
ぐった。

ホテルを引き払った修平は、亜優のアパートで本社への
報告書作りに追われていた。部屋をシェアすることにはど
んな広さであれ慣れていた。そして、キッチンや納戸の前
ですれ違うたびに、亜優に少しずつ明るさやもどってゆく
のが分かった。

週に二、三度は、チョコレート色の美しい肌をした現地
人女性のシルビアがヨルバ族の家庭料理を教えにやってき
た。長身の彼女は音楽好きの明るい性格で、亜優からピ
アノを習う時などは、指使いを間違えるたびに白い歯をむき
出しにして床の上を笑い転げた。

ナイジェリア人の家族や一族の絆は話にたがわず強かつ

た。或る日曜の午後、シルビアの家族と母方の親類たちがそれぞれ手料理とビール瓶を抱えてやってきた。女たちは大家からテーブルを借りて料理を並べ、男たちはドゥンドゥンという打楽器のリズムに合わせて踊り始めた。手招きされた修平もいつの間にか踊りの輪に加わって声を張り上げていた。シルビアの母親はシチューに入れる香辛料の話題で大盛り上がりだった。亜優は現地人の底抜けの陽気さに包まれて、不運としか言いようのないボナ州での事故の記憶から、ひと時でも逃れられる思いがした。

修平と亜優は、まだ《国境なき医師団》への理解と協力の問題では十分に和解していなかったが、それ以外の話題においては耳を傾け合い、互いの距離を縮めようと努力した。

例えば、修平は日本での亜優との日々を思い出していた。亜優は趣味の領域を超えたピアノとチェロの奏者だった。少女時代にアメリカで基礎を学び、インド勤務の頃は領事館主催のアマチュアコンサートで舞台に立ったこともあった。研修所にいた当時は音楽愛好家の集まりがあり、夜の会議室を利用して小さな演奏会を開いていた。修平は常によき理解者として目立たない方法でお膳立てをする側に回った。亜優はそんな修平に気づいていて、二人の関係を深めたいと願っているようだった。そして、今、アフリカ大

陸でも有数の大都会で生活を共にしていることが不思議でならなかった。

ラゴスの夜の街にはアフリカ音楽が溢れていたもので、修平もどこかで耳にしていたそのリズムにあらためて興味を抱くことになった。

二人は行きつけのレストランでの食事の後は、アパートで音楽談義を長々と続け、クラシックのCDを流しては海外の山や湖の話をした。それは過去にも繰り返されてきたことだった。

時には、亜優はチェロを抱えて長い弓を優美に動かし、彼女の感情を表現した。言葉では尽くせないもの、それを修平はふんだんに受け入れながら愉しんだ。

「アダージオかしら？ 緩やかに、もつと情感を込めた方がいいかしら？」

「いや、ラメンタービレ。そこは哀れに、もつと悲しみを誘うように」

彼女は目を閉じ、自分の世界にもどってゆく。クラシック好きの修平の注文に、彼女なりの答えを模索している風だった。

チェロが担当する中音域と低音域はそもそも豊かで温かみのある音色を奏でる。しかし、そこは楽想によって、また奏者によって、より深い思念を込めることができる。亜優はアフリカで繰り返り広げられている悲劇の数々を、四本

の弦と一本の弓との交差によって表現しようとしていた。

「ラメンタービレ」。亜優は、修平の気ままな発想から生まれたアドバイスにさえ、真摯に耳を傾けた。そうすることで、修平と心も体も溶け合うことができたからだった。

亜優のナイジェリア赴任が決まる前、彼女は六本木の喫茶店で修平に向かって言ったことがある。

「チェロの名曲がバッハやエルガーだけだと思っている人は、スプーン一杯の紅茶で幸せを感じている人ね。あなたには、もつとたくさんの幸せをあげたい」

彼らにはもう少して、新しい生活の形式が一枚の絵画のように目の前に現れるはずだった。そして、その絵の前で将来を語り、子供を育て、日々の苦楽について語り合う日常が実現するはずだった。

しかし、亜優のナイジェリア行きがすべてを暗転させてしまった。

アパートの食事の準備が終わったところで、亜優は修平の背中に思いつめたような声を投げかけた。

「私、もう日本に帰れない。居場所がないと思うわ」

しばらく間をおいて、修平は彼女と向かい合うように座った。

「で、本当は何があったんだ？」

「私は、あの時男たちに連れ去られ、暗闇のなかで、その

うちの一人に押し倒されました。胸をはだけて、香料のきつい臭いがしていた。近づいてくる大きな目が血走っていて、彼は正気じゃなかった。いえ、狂気の間人でさえなかった」

亜優のまなざしが何を捉えているかは分からなかったが、修平はその固く凍りついた表情にかつてなく近寄りたいたいものを感じた。

亜優の乾いた唇がカサカサと音を立てそうな具合に震えている。修平は若いゲリラ兵たちの汗で黒光りした肌を想い浮かべた。「奴らも人間さ」。彼は心のなかで呟いた。

「それから、半月たって、エイズ感染を知らされました」

修平の喉元がゴクリと音をたてた。

亜優の話では、彼女が自らエイズに侵されたことを知ったのは《国境なき医師団》が運営するアブジャの病院での血液検査からだだった。婦長と思われる背の高い黒人女性は

こともなげに言い放ったという。

「この国では、栄養失調とエイズは珍しくないのよ」

実際に、病院での複数の外国人とのやり取りは手際よく進められ、来院者への説明も簡潔だが説得力があった。

アブジャにもどった亜優は多くの現地人女性と同じように、二つの重要な医学的検査を受け、その判定の時を待たなければならなかった。

彼女は、オランダ人看護師の励ましを受けながら、まずレイプの被害にあった経緯を説明した。それから、心の準備もないままに検査へと移った。看護師の説明では、DNAによってレイプ犯を特定するための法医学的な検査も含まれているとのことだった。他方では、抗生物質とあわせて妊娠を防ぐための緊急避妊薬が投与された。

検査結果の告知は事務的なものだった。その日のうちに、妊娠の兆候がないことが伝えられ、彼女は安堵のために涙を流した。ところが、ほっとしたのもつかの間、翌朝にはエイズ検査が陽性であったことを知らされたのだった。その瞬間には、今度こそ深い谷間に突き落とされたような恐怖を感じたという。

それからというもの、亜優は、《国境なき医師団》の或るフランス人医師に相談し、エイズに関する基礎的な知識を得ようと努めたのだった。

一九八〇年代にエイズが発生したとき、《国境なき医師団》は感染予防の応急措置を行ったが、まだ本格的に取り組む体制はできていなかった。また、これだけの規模と勢力をもつ感染症に人道的医療団体が対応できるかどうかの議論が内部で沸騰した。そして、その主な舞台であるアフリカの、経済的にも治安のうえでも様々な困難を抱える国々で果たして長期のケアができるのか疑問視された。

やがて《国境なき医師団》の現地スタッフにも感染が広

がり、薬剤治療の道も開けてゆく過程で、エイズとの闘いの準備が始まった。さらに、この病気が最も蔓延しているのはサハラ砂漠よりも南のアフリカ諸国であることが国際的に認知されるようになり、それまでジレンマのような足踏み状態にあった人道的医療団体は、この感染症と正面から闘うことを決めたのだった。

一方、亜優にはそのフランス人医師のほかにも力強い味方がいた。反政府ゲリラから救出された日本人看護師の小田千恵子だった。五十代半ばの彼女は、沈みがちな亜優を抱きしめては励まし、自らが関わってきた聴き取り調査のファイルを示して語りかけた。

アフリカ大陸では、南アフリカを中心に女性や子供たちをエイズから守り、罹病者に対してはその治療から生活までを支援する取り組みがなされてきた。そうしたなかで行われた調査結果では、若い女性たちの多くが、自分がエイズに感染したことを告白した時に、家族、雇い主や仕事の仲間たち、ごく親しい友人たちまでもが示した偏見や差別に深く傷ついたという。なかには妊娠している女性もおり、エイズ検査が陽性の赤ん坊を生むことに大きな不安を抱いたという声も少なからずあったらしい。

亜優は、小田がそうしたアフリカの悲劇について詳しく紹介することで、自分一人が不幸な事件に遭遇した訳ではないという事実を分かせたいのだと理解した。

アパートの出窓からのぞく景色は、一枚の古びた絨毯の絵柄を思わせた。

修平は、亜優が小田やフランス人医師から借りたファイルに時間をかけて目を通し、彼女が直面している困難な現実について少しでも理解し、彼女に寄り添いたいと願った。

体調を尋ねると亜優は、調子が悪い日もあれば良い日もあり、むしろ気持ちの浮き沈みの方が負担になると応えた。「君にはピアノがある、チェロがある。君だけの小さな宇宙があるじゃないか」

亜優はしばらく考えていたが、ケースから取り出した弓を手に取り、おどけて見せて、戦いを始める騎士団長の合図のように直立させた。それからおもむろに弦を震わせ、ベートーベンのチェロソナタ第三番を奏で始めた。

静かな低音で、床を這うようなその調べは、彼女の周囲に波紋のように広がり、やがて現実から隔絶されるための堅牢な壁のように、その振動は徐々に立ち上がっていった。

6

修平は、国際電話で研修所長の浦谷にラゴス滞在を一月延ばしてもらうよう頼んだ。浦谷も事情を察し、「彼女を無事に連れ帰ってこいよ」と励ましてくれた。

一方亜優は、午前中は読書や音楽鑑賞で静かに時間を過ごし、午後になるとラゴス大学の付属図書館に通う生活をしていった。彼女は、フランス人医師リユファス・カルマンの紹介で心理カウンセリングを受けており、余った時間を利用してナイジェリア国民のエイズ感染と治療の実態を調べているのだという。

修平も、現地事務所の職員から、この国の情報を得るためには数ある大学のなかでも最も権威のあるラゴス大学の関係者の話を聴くか、図書館で整理された文献を読む方法が効率的だと教えられた。

昼食を済ませた後で、彼の方から大学の話題を切り出し、この日は二人で付属図書館に行くことになった。

海岸から一キロほどしか離れていない敷地のなかに校舎が立ち並んでいる。図書館の外壁は傷んでおり、それほど大きくもなかった。ただ、学生たちの身なりはあか抜けており、日本の学生と同じような穏やかな表情をしていた。さらに、褐色の肌や縮れた髪は国内共通のものだが、彼らにはラゴスから離れた地域の若者にはない聡明さと気品があった。修平はここでも、ナイジェリア国内の貧富の差がもたらす現実を目の当たりにした。

亜優の案内で、二人は疾病と医療に関する著書のコーナーを眺め、書架の長い列に沿って歩きながら、できるだけ

年代の新しいものを拾い読みした。時には亜優が修平に声をかけ、医療機関や慈善団体のヒアリング結果を読み聞かせた。彼女はまるで日本の大学院生や若い助教のように熱心だった。

例えば、イギリスのメディアによる或るレポートは、ナイジェリアの男女差別の実態について赤裸々に伝えていた。この国では、女性を男性の道具とみなす考え方や慣習があり、妻は夫に常に服従させられている。妻は儀礼的な名目がない限り夫に黙って外出できず、人々の前で夫に恥をかかせるようなことがあれば当然のように暴力を振るわれる。また、夫の意思を拒絶するような行為も言葉も暴力の対象となる。例えば、エイズの感染を防止するためにコンドームを使って欲しいという要望は概ね無視される。

さらに、エイズ感染を知らされた若い女性たちの多くが自殺を考えたと答えていた。そしてその理由の大半が、小田千恵子の話のとおり、この国での感染者に対する周囲からの容赦のない差別だった。

「シルビアは、本当はエイズ患者なの。私と同じようにゲリラの男にレイプされた」

亜優の絞り出すような低い声が床に響いた。

夜想曲は、シルビアのたつての願いで、穏やかで抒情的な調べになるように亜優が編曲を重ねたものだった。シルビアには、チェロの楽曲はどれも重すぎて、もつと癒され

る音楽とそれに聴き入る時間とが必要だったのだ。

反政府ゲリラの兵士たちの性犯罪については、さすがに多くの記述を見いだせなかったが、彼らから奴隷のような扱いを受けた女性とその子供たちからもエイズ患者が生まれているとの報告があった。政治面では、反政府組織はボナ州の町や村を武力で制圧し、住民たちと外部との接触を禁じていた。また一時期、実質的に囚われの身となった市民は数十万人に達し、食糧不足、医療の不足が深刻化しているとのことだった。それに対して、政府軍は住民の奪還作戦を展開したが、武力行使の長期化によって死者と病人の数がますます増加し、そうした紛争の最中にもエイズ患者が増えている実態が報告されていた。

「こんなにひどい現実を知らなかったわ。サハラ砂漠の南側のことでも大体分かっているつもりだった」

「まったくだ。暢気というか、無知だね、俺たち」

修平は言葉どおり情けない気持ちになって分厚いファイルを書架にもどした。とたんに、木材を燻した煙のような埃が舞った。

「スーダンも惨かったけれど、ここでも信じられないことが行われている」

修平は思わず、苦い息を漏らした。

「スーダンで何があったの？ あなたが反政府ゲリラに拘束されたことは会社の人に聞いたけど、詳しい話は私にも

してくれなかった」

「必要がないからさ」

「私は、あなたと同じ体験をしたのに？」

修平はこの時、亜優の方から無残な傷口を示してでも歩み寄ろうとする意思を感じた。

「そうかも知れない。でも……」

彼はそこで言い淀んだ。

修平は、スーダンの砂漠地帯で見た大きな黒褐色の鳥を思い出していた。ガラス玉のような眼珠で彼の様子をうかがい、首を動かすたびにギシギシという嫌な音をさせていた。あれは、アフリカ原住民が信じる悪の力の化身ではなかったか。宇宙に存在するその力は、病気や貧困、紛争と破壊、或いは多くの人々に死をもたらすもので、魔術師の霊力で鎮めなければならないと信じられている。ナイジェリアの南部でも、そうした呪術的な儀式的存在が知られていた。

結局、死神のような大きな鳥と魔術師のイメージが、修平の細かな記憶を再び呼び覚ますことになった。

修平は亜優に、楊たちと灌漑用の工事資材を運ぶためにスーダンの国道をひた走っていた日のことを話して聞かせた。そして、反政府ゲリラの襲撃を受け、楊と離れ離れになって、修平だけがゲリラに拘束されたことを話した。

「その日のことは、少しだけ楊敏さんから聴きました」

「楊は、四年前に死んだよ。アフガニスタンで地雷の餌食になった」

亜優の顔がとたんに引きつった。

「インドのデリーで、一緒だったことがあったんです。口は悪いけど、温かい人でした」

「皆、死神のせいだ」

そこからは、覆面をした大男のせいで母親たちとの間を引き裂かれた哀れな少年の話になった。目の前で繰り広げられた蛮行の記憶に、修平は憤りを露にした。

「ひどい巻きぞえを食った。仕事とはいえ、人助けじゃないか。みんなアフリカのためにやっているのに」

亜優は俯きかげんになって聴いていたが、急に顔をあげた。

「私たち日本人の理解できない世界で、理解できないことが行われているってことですね。でも、修平さんはそれを現地の人たちのせいにして、逃げ出そうとしている」

修平は痛いところを突かれた気がした。研修所で海外勤務を待ち続けている男に、人道支援の手助けも何もなかった。会社の幹部たちの間で、スーダンの事件は人事上の引継ぎ事項になっていた。今も修平の胸に、自分が未だに要観察の身であることの口惜しさがこみ上げてきたのだった。

そして、亜優が《国境なき医師団》への執着を次の言葉にしようとしていることが分かって、彼は重い頭を横に振っ

た。

相変わらず図書館通いを続ける重優に、修平は会社の意向を伝える機会をうかがっていた。浦谷との約束は期限内に果たさなければならなかったし、修平自身も研修所の次年度のカリキュラム作りが待っていた。

しかも、このままいたずらに時間を過ごしてしまえば、重優の病気の悪化が心配された。現状としては、薬剤治療で進行を遅らせることが可能となっており、抗ウイルス薬の投与は彼女に精神的な安定をもたらしていた。ただ、日本にもどればアフリカの現地とは異なる高いレベルの対応が間違いない期待できた。

会社への報告書には、重優のエイズ感染について《国境なき医師団》からの情報提供の内容を簡潔に転記した。後は、彼女次第だった。

雨季の終わりがテレビのニュースとして報じられた朝、修平は帰国の意向を彼女に確かめた。決して押しつけがましくなく、本人の決意をよんわりと促すつもりだったが、やはり互いに堅苦しい雰囲気になった。

重優はワンピースの襟から肩の傷に触れ、今までで一番大きく深いため息をついた。

7

修平はフランス人医師のリユファス・カルマンに会ってみることにした。彼がメンタルヘルスの専門家でもあることを知ったからだだった。

ラゴスのMSF事務所はビル街のなかにあった。

白髪のカルマンは、明らかに修平よりも年上だが、精悍な面構えに俊敏な動作を併せもっていた。彼はカルテを山積みにしたデスクから気難しそうな顔をのぞかせた。デスクの周りにはミーティングのための椅子が並べられ、煙草の吸殻が散乱している。そこに似つかわしくないものとして、ビートルズナンバーのレコードのジャケットが無造作に置かれていた。

「君も音楽愛好家なんだって?」

訛りのある英語が初対面の雰囲気や和らげた。

修平は、今の重優にとって心理カウンセラーになることが本当に必要なのかどうかを尋ねた。その仕事に就くことで、エイズ感染のショックから立ち直ることができるかどうかを確かめたかったからだ。

「あの日本人女性は、もう自分のことなんて考えてないさ。我々の立派な仲間だ」

その言葉だけですべてをはっきりさせようという、カルマンの明確な意思が伝わってくる口ぶりだった。修平はカルマンがなぜ《国境なき医師団》に加わったのかを知りた

季節は晩秋へと移ってゆき、乾季の訪れと同時にサハラ砂漠から強風が吹きこんできた。ハマターンと呼ばれるこの風は、砂漠から微細な砂塵を運びよせ、ラゴス全体に不快な乾燥をもたらすものだった。

帰国の判断を先延ばしにした重優が、ラゴス大学への入学準備を進めていることを知って、修平は驚きと焦りを覚えた。彼女の両親はもちろんのこと、浦谷や会社幹部との約束を果たせなくなることを懸念したからだだった。

そして、或る日、彼女の新たな決意が修平に伝えられた。「エイズ患者のための心理カウンセラーが必要とされています。妊娠した若い女性や、子供たちのケアが必要なんです。私も資格をとって手伝いたいと思います」

「会社を辞めるということ?」
「わがまま言って、すみません。私自身のためでもありませんが、だれかのために何かをしたいんです」

重優の頬から膨らみがなくなり、眼球の大きさがいっそう目立っている。修平は、彼女が鏡の前の自分の容姿と向かい合い、残された時を指折り数えているさまを想像した。その一方で、《国境なき医師団》の職員からカウンセリングに関する話の聴き取りをしながら、必死に自分の居場所を探そうとしている彼女の姿が痛々しく思えてくるのだった。

くなつた。しかしその前に、フランス人医師は組織のあらましを編集したパンフレットの或る箇所を指先で示した。

そこには、彼らの人道的支援が、尋常ではない場所に尋常な空間を築くことだ、というメッセージが記されていた。「ここでもあらゆる行為が困難だが、例えそうであっても、我々は続けてゆくだけだ」

毅然として語尾を強めたカルマンは、今度は穏やかな笑顔を修平に向けてきた。そして、二人はどちらからともなく手を握り合った。

ビル街の生暖かい風に押されるように、修平は数ブロック先にある日本領事館に向かって歩き始めた。ラゴスでの日本人の雇用に関する情報を得るためだった。仮に病院や診療所の日本人医師のもとで働けるなら、重優の体の負担が軽減できるのではないかと考えたからだだった。

その後しばらくは、重優の様子に大きな変化はなかったが、夜中にうなされたような喘ぎ声が聞こえるようになった。それが、肉体の痛みからなのか心の痛みによるものなのか、修平には判断がつかなかった。

また彼自身、まるで重優の苦悶が乗り移ったかのように胸が詰まって寝苦しい夜を過ごすようになっていた。実際に近くのレストランの支配人からは、ハマターンの砂塵が肺に侵入し、重篤な病気を引き起こすことがあるので注意

するようにと言われていた。

修平は、およそ四十六億年前に誕生したこの球体の地表が、やがて人間たちの重さに堪えかねて破裂する様子を夢想することがあった。それは、ラゴスの雑踏のなかを歩き回った日に起こりがちなことで、或る時は寝酒を飲んだ後のうたた寝の浅い夢のなかで、びっしょり汗をかいてもがいていた。

タム、タム、タターン。いつものリズムが響き、顔を白く塗ったたたくさんのアフリカ原住民が飛び跳ねている。

「騒ぐんじゃない！ おいおい、そんなに跳ねるなよ。壊れるじゃないか」。それは声にならない呻きだった。やがて、もう一人の自分が現れ、論すように語りかけてきた。

「こんな野蛮なリズムはお前にふさわしくない。耳を澄ますんだ。お前を育んできたリズム。北半球の音楽家たちが作り上げた正当な楽曲の調べだ」。しかし、アフリカ原住民の息遣いに似た低音は、どこまでも執拗に迫ってきた。修平はそのたびに身もだえた。

陶然とした意識の間に浸ったまま、修平は湿った固いベツドのうえで朝を迎えた。

8

日本からの電話は、修平たちの様子を確かめるためのも

そんな日の夜更け、報告書の書き続けている修平に亜優が声をかけてきた。彼女はカルマンに同行して、もう一度ボナ州を訪れたいのだという。

「エイズに罹った女性や子供たちの役に立つ仕事、それを目指していることになった原点に立てば、気持ちの整理がつかうと思うんです。それから父と母に手紙を書いて、ありのままの私を分かってもらいます」

背筋を伸ばした彼女は、言い出したら聞かない時の、不自然に晴れやかな顔つきになっていた。

修平は急いで考えをめぐらせた。ボナ州へはもはや会社で手当てできる便はなく、《国境なき医師団》に協力するかたちで出かけるしかない。ただし、北東部の武力抗争は激化しており、まして病人を戦場に連れて行けるわけがない。彼はそうした結論を亜優に投げ返してもらうために、カルマンに再び面会を求めようと考えた。

しかし、カルマンは隣の州の支援に出かけていて十日ほどもどらないとのことだった。それを聞いた亜優も、彼の帰りを待つことになった。

カルマンの不在を知った修平は、久しぶりに落ち着いた気分になった。またそのために、亜優に対する態度も寛大になり、思い出したようにチェロの演奏をリクエストした。「さあ、弾いてくれ。残酷なこの世を忘れるためにはな

のだった。庶務係長の長澤は伝えるべきことが多すぎて早口になっていた。

修平が作成した江島亜優に関する報告書は社内の幹部会で報告され話題になったらしい。もちろん社員には知らされていないが、研修所の一部にはエイズ感染の事実が伝えられ、帰国後に通院する医療機関探しも進められているという。

また、亜優の両親にも報告書を読んでもらい、今後の身の振り方について何度か相談を重ねているとのことだった。修平は亜優に、彼女が関心をもちそうなことだけを話して聞かせ、会社がさらに一月の猶予をくれたことを伝えた。やはり彼女は、両親のことを第一に気にしていた。

「父や母には理解できないと思います。アフリカの内陸深くで行われている残酷な行いについて。女性や子供の尊厳がこんなにも惨く踏みにじられていることを。理解できないことは、憎むこともできない」

その口ぶりはまだ、日本に帰ってもよいというものでも、帰りたくないと言断するものでもなかった。

ハマターンが強く吹きつけるようになってから、亜優は少し体調を崩し、心理カウンセリングの受診を休むようになった。チェロの弓を握ることをやめ、シルビアを手本にピアノの夜想曲で自らの心身を癒そうとしているように見えた。

く、虐げられた魂たちを慰めるために」

珍しく古めかしい言い回しをする修平の意図が分からず、亜優は首をかしげて考える仕事をした。そして、ゆっくりと立ち上がり、ベツドの脇に寝かせたチェロのケースを抱き起こした。やがて彼女の演奏が始まった。

おごそかに書き起こされる歴史の叙述のように、ゆったりとした導入部には、生きとし生けるものへの愛着に似た深い思いが込められている。大きく波打つ低音の調べはすべてが俯瞰できる高い場所へとゆっくりいざない、その結果、音楽を介して二人の意思は絡まり合い、やがていつものように一つになることができた。

「そこは、ラメンタービレ。湿り気を帯びた哀切さ。アフリカの苦しみと悲しみを慰めるように。もつとアフリカの弦の重さを意識して」

亜優は黙って頷いた。

出窓の外には、大きな鳥のように黒々とした翼を広げた楡の木が揺れている。背後から亜優の奏でる気品のある旋律が漂ってくる。修平はスーダンで見た少年の、涙をたたえた大きな瞳を思い起こしていた。あの少年にどのような未来が待っているかと、そのことと人間としての尊厳とは無関係に違いなかった。

亜優がチェロを抱えて窓辺に近寄ってきた。

「紛争の傷を癒すためには、修平さんが言うように音楽の

力が必要かも知れないわね」

亜優は修平から少し離れて椅子に座った。彼女は髪をかき上げながら眼を閉じ、両手を組んで上向き加減の姿勢をとった。今度は、彼女自身の癒しの時間だった。

彼女がいつも言うように、頭のなかを空っぽにし、それからゆっくりと音を注いでゆく。音はやがて音楽の形式に編み上がり、時間をかけながら重厚な低音と軽やかな高音を交えた楽曲となる。すべての感情が音楽に同化し、魂は天上に召される。もはや苦しみも悲しみもない世界に包み込まれる。

しかし、修平は思った。どんなに崇高な音楽の形式も、人間のなまの記憶を消し去ることはできない。母親の腕の関節を銃弾で打ち抜いた少年が、もはや家族や隣人たちのもとに戻ることはないように。

亜優は恐らくこの国を離れることはないだろう。カルマンの帰りを待ちながら、そうした憶測の影は修平の気持ちのなかで次第に大きくなっていった。エイズの治療は時間を要し、少なくともその間は《国境なき医師団》への協力は続けられるだろうと思った。

ただ、修平は、その先に待ち構えている亜優の死を予測することを恐れた。シルビアが好きな夜想曲は、やがて弱弱しい音色に変わってゆき、病魔に侵された彼女の細い指先がやがて鍵盤の一番高いキーを押してすべてが終わって

しまう。彼女を失うことは、どんな方法によっても堪えられないことだった。

カルマンは予定よりも二日早く帰ってきた。そして、修平からの伝言を聞いて彼に電話をかけてくれた。

修平の口から亜優の要望を伝えると、意外な返答だった。医師と看護師十数人に緊急の依頼があり、ボナ州の新たな戦場で負傷した市民の治療に出かけなければならぬというのだ。亜優にとってはさっそく願いが叶うかたちになった。

彼女は修平に黙って看護師の小田に自身の希望を伝えていたのだった。修平は会社としての判断をどうするべきか迷ったが、彼女にとってこれが最後のチャンスになることを思うと、一切を自分の腹に収める決意を固めた。

ボナ州の町や村は、政府軍と反政府ゲリラの抗争によってかつてない危機に瀕していた。自宅を追われ、医療はおろか水や食糧、避難場所さえままならない市民は数十万人とも報告されていた。そこへ駆けつけた《国境なき医師団》は、負傷した人々の手当て、特に重度の急性栄養失調に陥った子供たちの支援に忙殺されることとなった。

ゲリラへの政府軍の対応は困難を極めた。州土を奪還しても、またいつ襲撃されるか予測がつかなかった。そして、襲撃のたびに《国境なき医師団》の身にも危険が迫ること

になった。

そうした情況のなか、亜優はカルマンが率いるグループの助手として、政府が調達した薬品や乳幼児向けの食糧を配分する役割を任された。修平も彼女に付き添い、同じように見よう見真似の支援業務に就くことになった。

一行は、最初の町までワゴン車を連ねて移動し、数日前に襲撃を受けた民家の近くにキャンプを構えた。そこでは、恐怖にとり憑かれた若い女性や子供たちが家屋の陰や雑木林のなかで震えていた。亜優はシルビアに似た長身の女性に思わず駆け寄ったが、もちろん彼女ではなかった。病院や学校は破壊の対象となり、広い避難場所の確保は難しかった。修平と亜優が薬や食糧の補給作業を終え、テントの床に自身の体を横たえたのは、まさに深夜の時間帯だった。

翌朝早く、ワゴン車の隊列は二つ目の町に向けて出発した。

途中、小川や深くえぐられた轍の跡に阻まれながら、ようやく昼過ぎになって町の中心部らしき場所に到着した。そこは反政府組織の攻勢がかるうじておよんでいない地域だった。

しかし、人気がない街路には不穏な空気が漂い、広い市場も露店を畳んだ状態だった。カルマンは同僚たちと地図を広げて打ち合わせを始めた。護衛の政府軍兵士の一人が、

肩から自動小銃をおろして身構えた。

その時、市場の北側で銃声が響き、泣き叫ぶ女たちの声がした。そして、その騒ぎを煽るようにあちこちでサイレンが鳴りだした。修平は亜優の手を引き、近くの建物のなかに飛び込んだ。折り重なった体が乾いた土の床の上で弾んだ。修平は腰の痛みに顔をしかめた。

政府軍兵士の自動小銃が、建物の反対側で鋭い連続音をたてている。

「これは、戦争だ。ここを出よう。俺たちがいるべき場所じゃない」

「いるべき場所って、どこですか？」

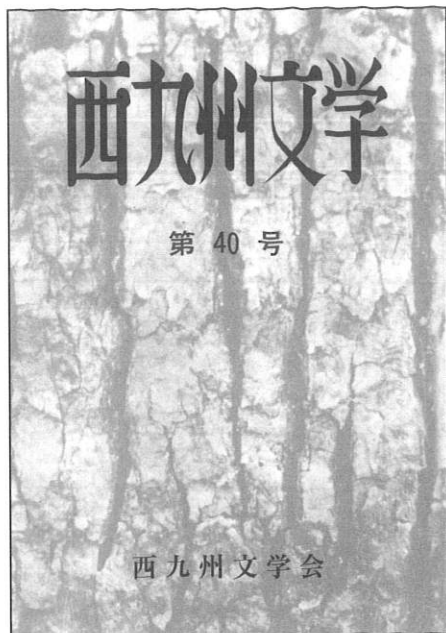
「日本に決まってるじゃないか。戦闘に明け暮れたり、栄養失調の赤ん坊が目の前で死なない国……」

修平は口のなかに渴きを覚え、それ以上は言葉を継ぐことができなかった。亜優の気持ちに寸分の変化もないことが、彼女のこわばった表情から見て取れたからだだった。それにしても、ここで言い争いをする時間はなかった。

医師や看護師たちが町の南側に移動する姿が見えたので、修平は亜優を促して道路に飛び出した。修平に手を引かれながら、亜優は彼の耳元ではっきりとした声をあげた。

「私はエイズと闘います。この国の女性や子供たちと一緒に」

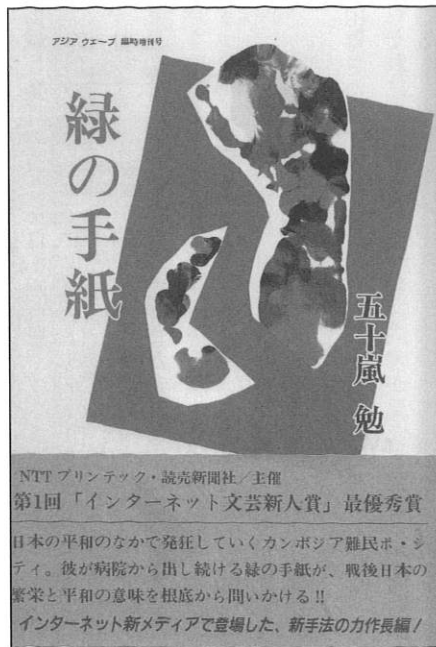
修平も負けずに、押し殺した声で応じた。



寺井順一
てらい じゅんいち
1954年生まれ
早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業
長崎県大村市在住
同人誌『西九州文学』発行者
2017年『静かな隣人』で
第32回長崎県文学賞受賞



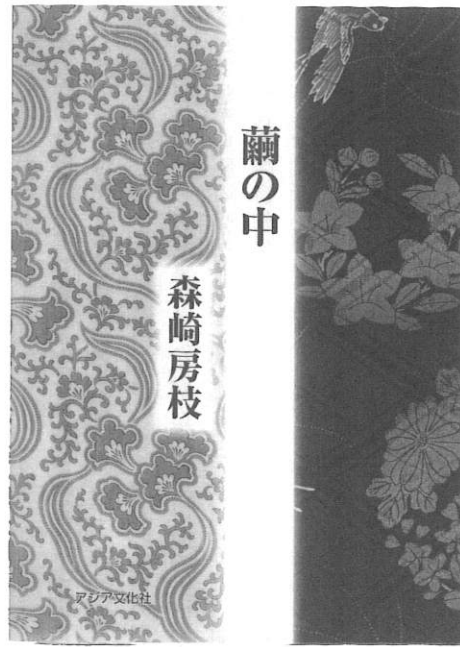
1600円 (税込/送料共)
ブイツーソリューション
御注文はアジア文化社まで



1700円 (税別/送料共)
御注文は折込葉書でアジア文化社まで

銃声がいったん途絶えて、それから何時間たったか分からなかった。傍らの重優は、強行軍のうえ再び銃撃の恐怖を体験したために、憔悴しきって眠っている。
彼女の褐色に焼けた額や頬はアフリカの健康的な少女のものでありながら、兵士から奴隷のような虐待を受けたとされる若い女性の、苦悶の表情を思わせた。
地上のどんなに気高い音楽によっても癒されることのない苦しみと悲しみ。その象徴でもあるかのように、スーダンで出会った少年のやるせない表情がゆっくりと視界をよぎった。ここは、死が隣り合う戦場なのだ。修平は不意に、無音の真空状態のなかに一人だけが取り残されたような、

「カルマンは、困難なものじゃないよせん困難だと言っていた」「そうじゃなくて、私には、今のこの現実が大切なんです」
重優はその言葉を言い終えると、修平の掌を勢いよく振り払った。
レンガ造りの建物が互いに寄りかかるように倒れていた。その裏側に、機材がむき出しになった車の修理工場があった。廃屋となつてから月日がたつていてと見えて一面が土埃に埋もれている。二人は力を合わせ放置されたベッドとテーブルを弾除けがわりに立てかけ、その後ろに身を伏せることにした。もはや言葉を交わす気力さえなくなっていた。



まほろば賞特別賞・銀華文学賞優秀賞受賞作品
森崎房枝名作集 1500円 (税込/送料共)

不思議な感覚に襲われた。それは、彼が重優に関して恐れているたった一度の瞬間の、絶望的な静けさに似ていた。
〔西九州文学〕40号より転載
※この小説は、「国境なき医師団」(レネー・C・フォックス著 坂川雅子訳 二〇一五年 みすず書房刊) および「MEDICINS SANS FRONTIERES JAPAN」の公式サイト情報を参考に執筆したフィクションである。

ひたむきで真剣

長崎県に「西九州文学」という同人誌が誕生したのは五十五年前、昭和三十八年のこと。二、三十歳代の文学を愛する錚々たるメンバー男性四人で始まったのである。創刊号は素晴らしい作品が揃い、話題にもなった。

しかし二号を発行した後、ジャーナリスト、公務員の彼らは異動により県内外に散らばり、多忙な職務に埋没、やむなく休刊となった。

それから二十年の歳月が流れ、昭和五十九年、念願の第三号復刊を果たし、作者も増え支援する会員は百名を超えた。その後二十年余、年一回の発行ではあったが、熱い思いは消えることなく存続してきたのである。

遅れて平成十一年に私は入会したが、師と仰ぐ四人の先輩方（川道岩見、田中豊英、定来文彬、宮崎栖吾郎）との合評会、親睦会は貴重な、幸せなひとときであった。だが、それはいつまでも続くものではない。

やがて二度目の危機が訪れる。七、八十代の師たちが病死、あるいは病気で一人ずつ去っていき、師との永遠の別れはつらく、いつまでも寂しいものであった。平成二十三

年、未熟な私が発行人となったが、新しい体制の中で辞めていく人もあり、残ったのは女性ばかり。編集者・徳永絹代、編集委員・浦川ミヨ子と三人で会を続けたが、早急に新しい作者が必要だった。

間もなく、県文芸で受賞した寺井順一が入会し、亡き田中氏の後輩である新聞社のOB達が作品を寄せ、また、大阪文学学校の生徒が二人加わるなど、有能な書き手が一挙に七人も増えたことは幸運だったとしか言えない。おかげで年二回発行が実現し、同人誌評にも取り上げられるようになり、四十号の節目を迎えた今年は「文芸思潮」に寺井順一の作品が転載されるという栄誉を頂いた。

現在、同人七名、会員五十四名。詩、小説、エッセイを掲載し発行部数は三百〜四百冊。

昨年の夏発行の三十九号では戦争の作品が多く、原爆をテーマにした浦川ミヨ子作「きのご雲」は原爆の悲惨さを感動的に伝える佳作だった。また寺井順一は祖父の原爆体験を取材し「静かなる隣人」を出版した。被爆長崎の同人誌として、戦争のない世界を目指し、ずっと取り組んでいかなければならないテーマである。

作者の皆さんは、圧倒されるほどひたむきで真剣である。困難さゆえに思考し、書く喜びが湧いてくるのだろう。それぞれに個性があつて文体、内容が異なるところが面白いと読者に評されるが、作品は作者自身を投影する。自分で

上の物は書けないし、創造力が努力して身に付くものでもない。人間として成長を続けていかなければ、作品は内容のないものになってしまうだろう。

後期高齢者で気力体力衰えた私は、欲がなくなり、頑張ることよりも頭の中に広い宇宙を感じつつ、温かい作品を書きたいと思っている。

だから、こんな私が発行人では会のためにならないので退き、四十一号から寺井が発行人を務めることになった。若く優秀な彼が代表となつて「西九州文学」は活気を得て、大きく発展することを確信している。遠方の会員も多いので、合評会での再会が先ずは楽しみである。

（記／居原木咲子）



「西九州文学」合評会

「西九州文学会」

〒 856 - 0823 長崎県大村市乾馬場町 856

発行者 寺井順一

ラスト・マン・スタンディング

野川 環

遠くで鳥の鳴き声でした。

なんの鳥か、桜井大樹は知らない。姿を見たことがない。朝方に鳴く、ような気がする、ということしかわからない。薄暗い中で、ゆっくり体を起こす。重い綿布団を横にどかす。カビ臭いような、ホコリ臭いような。

黄色い畳の六畳間は薄暗い。台所に面した磨りガラスから、ぼんやりした光が差し込む。朝、たぶん朝。大樹はべちゃんこの敷き布団を踏み、前庭側に面した窓を開け、兩戸に手をかける。軋るだけで動かない。上下にゆさぶりながら、最後は力技で戸袋に押し込んだ。

濃密な空気が部屋に流れ込んでくる。平屋の屋根よりも遙かに高いイヌブナの本々の間から、太陽の光がまばらに

差し込む。大量の蟻酸と新緑の瑞々しさとの混ざり合ったような、なんともいえない匂い。肺の奥いっぱい吸い込む。雨の日には雨の日の匂いがあるように、この土地にはこの土地の匂いがあった。

大樹は懐かしい気持ちにとらわれた。音や匂いは記憶と結びつきやすい。大樹の場合は、小学校の夏休みの記憶と強烈に結びついていた。アブラゼミ、ヒグラシ、アマガエル……。夜になると、カエルの合唱がうるさいくらいだった。祖父母はまだ生きていて、遊びにきた初日の晩は、いつも山菜の天ぶらだった。

今は、だれも住んでいない。

以前は毎年、ちゃんと大樹の父親が掃除をしにきていた。

ここ数年はそうすることもなく完全放置の状態だった。

大きく伸びをした大樹は、股の付け根の痛みで顔を歪めた。窓の向こう、太いイヌブナの一つに、さびの目立つMTBが立てかけてある。ハンドルの部分が少し見えるだけで、クマイザサに埋もれている。MTBをこぎこぎ三日かけてやってきたのだ。道中、ホテルに泊まったりはしない。適当な河川敷やだれかの畑のすみっこで寝袋を使った。アウトドア派だからではない。お金がないからだ。

二十歳そこそこの青春の自転車旅行ならまだしも、四十を過ぎた中年オヤジの自転車逃避行は、なかなかの悲惨さだった。

おすおす布団に戻る。自転車に乗り過ぎると股の付け根を痛める、ということを知り始めて初めて知った。どこかの角度で生じる痛みを恐れ、おすおすとあぐらをかく。股関節を開くことから、当然のごとく鈍痛が走った。痛みの余韻を味わいながら、じっと部屋の中を見回す。部屋の四隅には古いクモの巣。珪藻土の壁は、黒ずんでいる。畳のいたるところに、アリやクモなど瑣末な虫の死骸が散乱している。

布団にくっつきそうな虫の死骸を手で払おうかと思い、やめた。顔を三十センチほど近づけ、慎重に強力に息を吹きかけ、布団から死骸を遠ざけた。

鈍痛の波がおさまってくると、次は尿意だった。虫の死

骸だらけの和室を抜けるには靴下が必要だったが、昨晚脱いだはずのものは見当たらない。仕方なく、ぎしぎしいう股関節を再び駆動させ、トイレへ向かった。

なんだか嫌な予感したが、意を決してドアをあける。拍子抜けしてしまった。虫の死骸がこれでもか、という想像は杞憂に終わった。水洗タンクの下に若干のクモの巣があるくらいだった。

便器からの跳ね返りを極力抑えるために、腰をかがめながら、慎重に、じよほじよほと水洗トイレに尿を注ぎこむ。流そうと取っ手を引くが反応はない。ああ、と思います。どこかで水道の栓をひねらないと、水が使えないのだった。

トイレを出てすぐ右手の、四十センチほど下がったたきで、ナイキのかつて真っ白、今は真茶色になったローカットスニーカーをきっちりはく。踵を踏むのには罪悪感を覚えるから。子どもの頃から親にきつく言われ続けてきたことが、中年になっても染みついていてた。

玄関の引き戸をあけるとガラガラ鳴った。

軒下で伸びをする。思い切り立ちくらみがした。思わず両膝に手をつく。焦点を合わせようと足元を覗む。つま先のところまで黒光りするアリが列をなしている。目で追うとそのまま家の外壁の隙間に続いていた。いつかの夏休み、脱衣所のマット上に大量のアリの卵があったことを思い出す。もしかして、と嫌な予感にとらわれたが、とても確認

しに行く気にはなれなかった。

庭のほうから裏手に向かう。背の高いツツジが清楚ぶつた花をつけていた。朽ちた物干し台の横を抜ける。庭中とつか、森中に腐葉土が堆積していて、足もとはずつとふかふかしていた。

家の裏手は緩やかに下っている。傾斜の手前に丸い井戸があった。一人で開けるのは困難なほど重い石蓋がしてある。

井戸から半歩離れたところに、錆色の小さなフタがある。中には水道栓があった。

顔を上げ、斜面の先まで眺める。細いイヌブナの木々は根元を束にして寄せ集まり、枝々を広げている。イヌブナの小さなコロニーは、斜面の下まで点々と続いている。その先は、太陽の光の注ぐ砂利道。さらに向こうには杉林が広がっていた。

遠くから吹いてきた風が、前庭のイヌブナ、クマイザサ、ツツジ、ヤマアジサイ、立ち上がった大樹のクロップド丈のパンツ、と順番にさわさわ揺らした。

振り返ると、居間に面した窓は、まだ雨戸が固く閉じたまま。庭のほうに戻る。縁側に面した雨戸も閉じたまま。すべての雨戸をあけて、家を掃除しなければならなかった。電気がつくのかも、確認しなければいけない。昨晩はスマホのライトだけで、どうにか侵入し布団を敷くまでこぎつ

る。腐食臭なのか、すえたような甘いような匂いが、新緑の匂いと混じり合い、奥へ進むほど強くなった。

かつて別荘地として売りに出していた地域だが、大樹の子どもの頃から人氣がなく、ほとんど家は建っていない。十分も歩かないうちに、砂利道がT字に分かれる場所にきた。右に折れると、大きな洋館が建っているはずだった。

記憶の中の洋館は、いつかみたイギリス映画の古い屋敷と混じり、いやに立派だった。

砂利を蹴り上げながら進む。しかし洋館はなかった。あるのは立派な門扉だけ。建物は基礎だけを残してなくなっていた。ハルジオンの清貧な花が基礎を埋め尽くしていた。左手の杉林から、カラスが数羽、激しく鳴きながら飛び立つ。大樹は、心臓をぐっと掴まれたように驚いた。晴れ間にわずかに漂う白い雲に太陽が隠れる。陽光が弱くなり、大樹の気持ちに恐怖が芽生える。小走りにもとの道に戻った。

さきほどのT字路を左に折れる。少し歩くと、右側に一軒、ログハウス風の家。雨戸を固く閉ざし、車もない。人がいる感じはしない。

股関節の痛みのせいで膝の上げ方が弱い。必然的にじゃりじゃりと音が鳴る。じゃりじゃりじゃりじゃり進む。左手に、外壁を白く塗った二階建ての家。白壁はかなり汚れ、風雨で浸食されていた。閉め切られたアルミ製の雨戸。人

けた。ここで暮らすのなら電気は必要だった。ブレーカーを上げればつくのだろうか。洗濯機の確認や、冷蔵庫が使えるかどうかの確認、風呂場の掃除。風呂は古いもので、まだボイラーだ。大樹は使い方を知らない。すべてが一気に億劫になった。

そもそも、こんなところで一人、本当に暮らすつもりなのか。仕事は？ お金は？ 家族は？ 大樹にとっては、どれも考えたくない問題だった。

前庭まで戻つてくると、自転車のサドルをひとたでした。それから、クマイザサに囲まれて身動きできない自転車を救出するようにかたっぱしから踏みつける。清潔な匂いが鼻をつき、軽い罪悪感に襲われる。クマイザサは自転車に絡む行為をやめる気配はない。

諦めた大樹は、家の前の砂利道に歩み出た。車の車輪跡が見えないほど、オオバコやスズメノカタビラが群生し、中央部分には、ヨモギやスギナが、ひときわたかく茂っていた。

大樹はなるべくオオバコなんかを踏みつけながら、大通りと反対方向へ、ぶらぶら歩きだした。砂利道の両側には、イヌブナやコナラやミズナラやカエデが鬱蒼としている。ときどき、モミヤシラカバが孤立するように生えている。網の目のようになった枝々の隙間から、太陽の日差しがこぼれている。道の左右には朽ちた倒木が点々としてい

を寄せ付けぬかのように、セイタカアワダチソウが家の周囲に群生していた。ちょうど木立が途切れた隙を狙ったかのように、空を目指している。ニメートルを超える高さは、SF映画に出てくる別惑星の植物のようで、不気味というより、奇妙だった。

砂利道を家のほうへ逸れ、近づいてみる。セイタカアワダチソウが行く手を阻む。近づくと、家が見えなくなる。とてもかきわけて進む気になれず引き返した。

砂利道の本道に戻る。大樹の家の井戸の辺りから見えた杉林を抜けると、開けた土地に出た。そこは一面のセイタカアワダチソウ。まだ黄色い花をつける前。細い葉をいっぱいに伸ばしている。棒立ちの大観衆のように、辺り一帯埋め尽くしていた。

大樹は遠い過去に記憶を巡らせた。かつてここは水田だった。そうだ、覚えている。農家が一軒あった。田んぼにいるゲンゴロウをもらったことがある。そこだけは強烈に覚えていた。

いつから田んぼが使われていないのか、大樹には見当もつかない。びっしり伸びて群生したセイタカアワダチソウに圧倒されてしまう。なるべく道の左側を歩く。緑の茎の壁から、得体のしれない生き物が飛び出してきそうに怖かった。

半分ほど過ぎたあたりの右手に朽ちたような平屋が建っ

ていた。通り過ぎかかると玄関戸が開いていた。大樹は足を止め、若干の好奇心に駆られ、恐る恐る中の様子をうかがった。こんなところにだれか住んでいるのか。それともただの廃屋なのか。

はっと、砂利道に視線を戻す。人の気配がした。気のせいであった。だれもない。カサツと落ち葉が鳴る。ヤマバトが一羽だけ。首を小さくかしげながら、大樹を見ていた。こんな田舎の森にいても、カラスかハトしかいないなんて。大樹はうんざりした。

玄関に視線を戻す。「わっ！」と声が漏れてしまった。無意識に半歩あとずさる。玄関の奥に、腰の曲がった老婆が立っていた。暗がりから玄関戸へ、ゆっくり近づいてくる。

「幸弘か？」

老婆の声は震えていた。「幸弘なのか」と繰り返しながら、近づいてくる。悪霊の類かと思われ、腰を抜かしそうになった大樹は、大きく息を吸い込み吐き出した。どうやら認知症気味の老婆だと認識を改めた。「違いますよ」となるべく大きな声で伝えるが、老婆は意に介さない。

「わざわざ訪ねてきてくれたのか？」

老婆は玄関のたたきでサンダルをつっかけ、大樹のすぐ前までやってきて、じつと顔を見つめた。大樹は気味悪がり、相手にばれないよう、じりつと下がる。

の老婆さんのことは何も覚えていなかった。ただ、ゲンゴロウと、それをくれたおじさんの輪郭だけしか思い出せない。老婆は「あの子がねえ……」などと一人得心だ。そして「せっかくだから、ちょっとお茶でも飲んで」と、大樹の返事も聞かず、玄関のほうへ先導する。「応ご近所さんなので知らんぷりするわけにもいかず、大樹は老婆の後に続いた。

家の外壁は廃墟じみているのに、表札だけは立派だった。木製の厚みのある表面にしっかりと「桑西」と刻んであった。

黒ずんだ床材の軋む廊下はひんやりしていた。平屋でも天井が高い。居間も同じで、天井付近には、太い梁がむき出しになっていた。外から見た家の印象とはだいぶ違った。縁側から涼しい風が流れてくる。その先は小さな庭と、一面のセイトカアワダチソウだった。

梁の下の漆喰の壁には、先祖の写真だろうか、男性が四人、女性が三人、大樹のほうを見据えている。大樹は下から見かえし、七人の顔に順々に視線を移してから、縁側の向こうの、家庭菜園に向けた。

小さいがよく手入れされていた。セイトカアワダチソウにぎりぎりまで迫られている。逆にセイトカアワダチソウを切り開いた、という見方もできる。不思議なのは、セイ

「ああ……、ごめんなさいねえ。背格好が似ていたものだから……。こんなところに来る人間もいないものだから、てっきりねえ……」

声の感じも、ごく普通のお年寄りだ。大樹の早くなった鼓動が少しだけペースを戻す。

老婆は小柄で腰がやや曲がり、髪は真っ白で、後ろで一つに束ねてある。おでこや頬のまわりに深い皺があり、それ以外にも細かい皺が無数にある。目は限りなく細く、深い皺の一つにも見えた。はりのない皺とシミだらけの肌は、くすんだような色によく日焼けしていた。

「い、いえ。僕も昨日来たばかりなんで。すぐその」とイヌブナの点在する緩やかな斜面の上を指さし「家に住んでます。昔、祖父母が暮らしていた家で、二人が死んじゃってからは、時々、家族で使っていました。今はもうだれも使わないので、僕が一人で使ってるんです。昨日からすけれど」

老婆は腰を伸ばしながら、遠い目をする。突然「ああ」と声を出し、目を見開いたが、すぐに「んう？」と、黙りこむ。それから「あ、あれだ。あのお、ね？ あのご夫婦の！ よく知ってるよ。ねえ！ お孫さんね、大きくなっただねえ。まだその田んぼがキレイだったときには、よく遊びにきていたよねえ」

「はあ」と気のない返事をしながら記憶をたどる大樹。こ

タカアワダチソウの壁に一か所、奥へ続くような通路ができていた。昔、どこかの農家がイベントでやってたヒマワリ畑の迷路を大樹に思い出させた。

老婆は、麦茶を持ってきた。大樹は、切りガラスのグラスを一口含みながら、水出しだろうかと思っただ。水出しだったとしたら、汚染されている可能性のある井戸水をそのまま使っているかもしれない、などと考えてみたが、よく考えればどうだっという問題だった。たとえ、汚染された水を摂取して寿命が縮まろうと、今の大樹には大して重要でもなかった。少し前の彼なら、子のある親が事故で亡くなった、というニュースを見れば時々「自分が今死んだら、家族は途方にくれる。自分だけは死ぬわけにはいかない」と思ったりもした。

今は違う。その家族はもうなかった。家族ができる前は自己実現、という生きていく理由があった。家族ができてからはそれを捨てた。代わりに家族のために、というのがすべてを超越した理由になった。その家族を失った四十がらみの無職の彼は、はつきりいって抜け殻だった。

老婆は昔のことと現在のことを混ぜ合わせて語り出した。大樹はてっきり、自分の小さい頃の思い出話でも聞けると思っただ。老婆の話は徹頭徹尾、彼女のごく個人的なことだった。現在と過去を混ぜ合わせながら話す彼女の話をきくと過去から現在への時間軸通りに並べると、こうだった。

この地域は原発事故とは直接関係なかった。距離的にもだいぶ離れていた。ところが事故後しばらくしてから、風に乗ってやってきた放射能で帯は汚染されたことがわかった。自治体の担当者いわく、人体に影響のないレベルだから大丈夫、ということだった。

さらにしばらくたつと、森林や地下水、野生動物などへの蓄積が顕著だから、そういうものに触れたり、摂取したりしないことを勧める、というものに変わった。老婆の家族がせっかく収穫したコメは、廃棄処分になった。翌年以降の作付けもできなくなった。代わりの土地といってもそう簡単には見つからない。見つかったも手に入れるお金もない。そのうち自治体が除染を始めたという情報があったが、そのころには、もう廃業するしなくなっていた。以降、家族は仕事を求めて新天地へと引っ越し、老婆は一人、この家に残った。除染が終わったら、家族に知らせ、農業を再開することになっていた。当初の計画では、ただ、家族は住居を転々としていて、ついには連絡が取れなくなってしまった。自治体は、商業地域や住宅地域、農業の中心地域を重点的に除染した。結果、自治体内の観測地点の平均的な空間線量が下がった。除染作業は収束した。その後もしばらくは、個別に除染に応じていたが、何にも申し込まずただ待っていた老婆のところには除染チームはこなかった。だいたいが受動的なのが行政の特徴なのだから、そ

持って戻ってきた。

定形型の素気ない封筒もあれば、可愛らしいレターセット風の封筒まで、実に多種多様だった。

「息子たちに手紙を出すんだけれどね、いつも戻ってきちゃうのよ」

老婆が座卓に封筒の束を置く。「宛てどころにたずねあたりません」というスタンプがどれもこれも押しである。

何かしら返答したほうがいいのか迷いながら、大樹は「住所が間違っているんですかね」と言ってみる。

「違うの。知らないのよ、わたしが」

老婆の言葉の意味が理解できない大樹は、内心、ぼけているのだろうか、と思ってしまう。涼しげな江戸切子の青澄んだグラスから麦茶を口に含む。住所の違う宛先に手紙を出し続けるなんて、正気の沙汰ではなかった。そもそもなぜ老婆に黙って、家族は別の場所へ越してしまっただろうか。老婆を捨てるためだろうか。それとも、老婆はぼけていて、家族の越した先を忘れてしまったのだろうか。

老人特有の、同じ話を延々とループして話すのに疲れ果てて、大樹は帰ってきた。

玄関の上部にあるブレーカーを入れると、電気はあっさり使えるようになった。縁側に面した短い廊下の隅に、古い掃除機があった。コンセントを差すと、ちゃんと動いた。

れは仕方ないことなのかもしれないが。

老婆の話聞きながら大樹は、以前父親がこの別荘地を「もうだめだ」と売ろうとしたが、たった数十万円でも買手がつかなかったことを思い出した。だからこそ、大樹がこうして逃げ込むこともできたわけだが。

あまりに静かなので、遠くの国道を走る車の走行音が風に乗って聞こえてきた。音は段々と近づいてくる。すぐ外でバイクの軽快なエンジン音とギアを変える音が響いている。老婆は急に黙り込む。続いて「桑西さん」という声が聞こえた。老婆は話を中断すると素早い身のこなしで、玄関へ出ていった。大樹は見えない玄関のほうを見やる。「いつものです。ちょっとはちゃんと住所調べないと意味ないですよ」という若い男性の苛立った声がエンジンをふかす音にまぎれて聞こえてきた。

「いいのよ。私が好きでやっていることだから」

「……桑西さんがいいっていても、こちらでも、ちょっと問題になっていまして。小さい局ですから、なかなか忙しくて、こういうことをやられると、ねえ」

「そんなこといわないで、ね。悪いとは思ってるのよ。今年もかもめーる、買うから。ね、何枚くらい……」

「それじゃ……」

そんなやりとりを大樹はほんやり聞いていた。

バイクの音が遠ざかってゆくと、老婆が手に封筒の束を

目に見える虫の死骸や、生きているのをざっと吸い込んでまわった。こんな死んだような地域で、虫の死骸を掃除しているのはお似合いだと、自虐的に思った。

大した作業でもないのに疲労を感じた。普段しないことをしていると、それがほんのささいなことでも、疲れられる。敷きっぱなしの布団に戻り仰向ける。天井付近からぶらさがった照明の笠にトンボの死骸がいくつもある。あれはたしか、子どもの頃だった。大樹がつかまえてきたトンボを家の中で放してしまった。そのとき初めて、トンボも照明に群がるのだと知った。以来、トンボはあそこにとらわれたまま。死んでも何かにとられるなんて、まるで地獄だ。

ふっと眼が覚める。いつの間にか寝ていたらしい。部屋の中が薄暗かった。耳鳴りがしそうなほどの静寂。一瞬、ここがどこで、朝か夜かわからなかった。前庭に面した窓の網戸越しに、湿った夜気が流れ込んでくる。大樹は剥き出しの両腕を軽くさする。

喉の渇きと空腹を覚えた。老婆の家で麦茶を飲んだきりだった。

四つん這いで、六十リットルサイズのバックパックを引寄せ寄せる。途中、どこかのコンビニで買った食料の残りがあつたはずだった。がさがさやると、コンビニの袋が出てきた。菓子パンの空袋が二つと、カロリーメイト（チーズ

味)の開封済みの箱。中には、ひとかけらのカロリーメイ
ト。何も無いよりましで、口の中でもそもそやる。たまた
ず水道へ行き、確実に汚染されている井戸水を飲んだ。
口元をぬぐい、台所の窓枠にたまる虫の死骸を見つめる。
溜息が出た。どこもかしこも死骸で溢れていた。

布団に戻る。自然と正座していた。

つい何年前まで、彼は普通のサラリーマンで、妻と子
どもとマイホームに暮らしていた。原発事故なんて、関係
ないと思っていた。

ところが妻は、放射能の影響が子どもに及ぶのを恐れた。
水道水は使わなくなった。野菜の産地は外国産か西のほう
のものにこだわった。作るよりも、レトルトか缶詰を使う
ことが増えた。必然的にエンゲル係数は上がった。それだ
けで済めばよかったが、原発事故の収束の見えないことを
知ると、子どもを連れて西のほうの実家へ行ってしまった。

大樹は行けない。仕事がある。マイホームのローンもあ
る。妻や子どもに会いたい。距離もある。お金もかかる。
月に一度か二度、会えれば良いほうだった。その少ない
機会でも、会えば妻とは口論するようになった。妻は家族
が一つになるべきだ、と言う。仕事を辞めて、家を売って、
こつちで暮らそう、と言う。大樹は、家を売ってもローン
は残る、それにこの歳で正社員の仕事は簡単に見つからな
い、と言った。話はいつも平行線だった。

さっきの老婆、桑西さんの声だった。

安寧の時を突然破られ、動悸が止まらない。ただ、老婆
の声だからなのか、人の声だからなのか、少しほっとした
思いもあった。

立ちくらしながら、玄関へ出る。

「これね、久しぶりに作ったのよ、てんぶら。食べて」

老婆は大皿にいっぱい天ぶらを差し出した。揚げたて
の衣の香りが大樹のすきつ腹を刺激する。ゼンマイ、ヨモ
ギ、タラの芽、得体の知れないキノコなど野草中心だった。
昔は、よくタラの芽の天ぶらを作るために、祖父母と一緒
に近所を歩いて探した。きつと、今ならだれも取るものも
いないので、豊作に違いない。大樹はありがたく受け取っ
た。口内中に唾があふれていた。

テレビは地デジ対応前そのまま、砂嵐の画面以外は映ら
なかった。風呂場には近づいていない。暗くなったら、ス
マホをいじるしかやることがなかった。酒でもあればまだ
よかったが、どうしようもなかった。スマホからアダルト
動画サイトとんで、自慰でもして寝ようと思ったが、動
画が重すぎるので断念した。かつての妻とのセックスでも
想像して自慰をしようと試みるが、どうしようもなく虚し
くなり、勃起するどころか萎えきってしまい、そうこうす
るうちに眠ってしまった。

寝ぼけながら大樹は、息子の髪の色をかいだような気

いつの間にか、妻子に会いに行くのが億劫になった。乳
児だった子どもは、だんだんと大きくなるが、大樹のこ
とを父親と認識しているかは怪しいものだった。やがて「忙
しい」を理由に、妻子に会いに行くのを遠ざけるようにな
ってしまった。

夢のマイホームは、広くさびしかった。

溜息が出た。

腹は減っていた。ダイエット中の女子高生だつてもうち
よつと食べるだろう。動くのは億劫だった。いったい、な
んのために食べて、明日を迎えようとしているのか、わか
らなかった。

実家にいることは大樹にとつて苦痛だった。

除染されずに放置された地域の家は、別荘としても使え
ず、家族のだけれども見放されていた。だから彼は、こつ
そり鍵を持って、家を出た。まだ家に残っていた古いMT
Bにまたがって。

窓の外の夕間は、静かに部屋の中に広がってきた。大樹
の体のまわりにも柔らかい闇が満ちてくる。瞼を閉じると、
目の裏側にぼんやりした明りが見えた。それはほの温かく、
いつまでも浸っていたくなる感覚だった。

突然、玄関の引き戸がガラガラと音を立てて開けられた。
大樹は、心臓が止まるほど驚いた。

「ごめんくださいね」

がした。カビ臭いはずのタオルケットの匂いだった。

天井には、昨日と同じ、トンボの骸。閉め忘れた戸戸か
ら、早朝の弱い陽光がうつすら差し込む。彼の体にまだら
な模様を落とす。湿っぽい匂いがどこからともなく、六畳
間に染み込む。

大樹は息子を想う。今はもう小学生だった。この家に来
たことはない。この家には、息子との思い出は何一つない。
息子との思い出のある家はもうない。虫の死骸にあふれた
家だけが、今の大樹のすべてだった。

子どものことに考えが及んだ途端に、無気力さがこみあ
げてきた。とても布団から出る気にはなれない。無気力な
ら、こんな場所まで自転車をこいでやってくることもない
のだが、逃げる時には、だれしも力を発揮するものだ。

人生に流れなんていうものがあるのか、大樹にはわから
ないが、彼に聞いていえば確かにあった。一つ狂い始めた
流れは、支流が注いで巨大な本流になるように、彼の生活
を翻弄した。放射能で妻子が遠くへ避難したことで家族を
失ったとしたら、仕事を手放すことになったのもまた同じ
理由でだった。

大樹のかつて勤めていた企業も原発事故のあおりを受け
た。主要取引先だった東北の企業の幾つかを事故の影
響が直撃した。売掛金の回収がままならなくなった。新た

な顧客の開拓と併せて、売掛金の回収が進められた。当初はそれほど大きな影響とは見ておらず、樂觀していた。それが時間の経過とともに深刻になっていった。売掛金のほとんどが回収不能となってしまった。一時的に事業規模を縮小することになり、まさきき東北の営業所が閉鎖された。だが、それは負の連鎖で、経費削減を狙った戦略は売上高の予想以上の減少を招いた。一番の負担は人件費で、正社員を派遣社員に置き換えるために、早期退職の募集がかけられた。

大樹が家族と離ればなれになり、妻ともうまくいっていない期間が長くなっていった頃だった。早期退職金は魅力的な金額だったが、それだけで家のローンを一括で返せるほどでもなかった。この間、仕事も家庭ものすごい忙しさだった。少し休みたいとも思ったし、思い切って退職金を手に、妻子のもとで、新しい仕事を探しても良いとも考え始めていた。

半年ぶりに妻子に会いにいったのは、早期退職を決めてからだった。いきなり行って驚かせようと思っていた。ところが会いにいったのは妻子のほうではなく、大樹のほうだった。待っていたのは、離婚届けだった。

妻曰く「この半年間、一度も会いに来ず、連絡もほとんどしてこず、もはややっていくことは不可能という結論に達しました」ということだった。大樹にとつての半年間は、

バックを背負った。

大樹がどれだけ空腹でだるくて億劫だろうと、森の空気は彼に思わず深呼吸させるほど清新で濃密だった。気持ちに反して少しだけ頭が冴える。どこかで朝方に鳴く鳥の声がした。

しつこいクマイザサを足でのけ、MTBにまたがる。軽快に砂利道を走らせる。森を渡るひんやりした空気が、かっぱの大樹の体にわずかに生気を吹き込んだ。

森を抜けてしばらく走ると砂利道からアスファルトにかわった。金網に囲われたテニスコートは雑草に覆われ、コートの地面は至る所ひび割れ、見るも無残な姿だった。コートジ群は、静かにそれらしく佇んでいたが、管理事務所の窓ガラスは割れ、壁にはスプレーで落書きされ、廃屋感が溢れていた。レストランも三軒並んでいるが、どれも通りに面した全面ガラス張りの中はがらんとしていた。コンビニも潰れていた。

片側一車線の道路と敷地とをつなぐ場所には、車止めが並べられ、間を黄色いロープが塞いでいた。車止めの左端の隙間から自転車を出し、駅のある中心街をめざした。

車もまばらな、片側一車線の国道を四十分も走ると、駅のある商業地域にたどり着いた。

駅前には賑わっていた。というより、大樹が知っている街並みとは随分と変わっていた。駅直結型の巨大ショッピング

家族への想いを募らせる時間だったが、妻は逆だったらしい。妻のほうには決定的だと思える瞬間が間違いなくあり、以後はその積み重ねが膨れ上がるだけで、大樹への気持ちとは認識していなかった。いくら彼が「自分の子どもだ」と言い張ったり、思ったり、DNA的にはそうだったとしても、だ。妻の決断は絶対に覆らない決定だった。早期退職金の半分をローンの返済にあて、もう半分を妻の口座に振り込んだ。

夢のマイホームは広く寂しく、いやに奇麗で、無機質だった。子どもとの思い出が彼の体を四方八方から引っぱり、動けなくした。金銭的にも精神的にも、家を維持することができなくなった。日銀のおかげで、住宅ローン金利が安く抑えられていて、世間的には「買い」ということもあり、家は早々に売れた。築年数の浅さと、ファミリー向けの設計が有利に働いた。ローンの残額を払っても、多少のお金が手元に残った。

喉が渴いて、台所へ行く。水を一杯のみ、流しの大皿に目をやる。胃が空腹を訴えた。なんとなく、あの老婆が朝食を届けにきてくれることを願ったが、三十分たつても叶うことはなかった。

空腹と億劫のせめぎ合いは、僅差で空腹が勝利をおさめた。中身を畳の上におちまけて、財布だけをつめたバック

ゲモールができていた。シネコンやゲームセンター、ボーリング場、フットサル場、スポーツクラブ、巨大な駐車場も併設されていた。大樹の記憶では、かつては駅前にロタリーがあり、そのまわりに土産物屋やわずかな飲食店、ちんけなスーパーマーケットがあるくらいだった。気圧されながらも、ショッピングモールに入ると、中は人でごったがえしていた。きょうが何曜日か思い出し、合点がいった。

吹き抜けの高い天井は、採光性に優れ、黄色っぽい照明とあわせて大樹には眩しかった。

有名どころのアパレルブランドや雑貨店などが多かった。スーパーマーケットのコーナーを探すのに手間取るくらい広がった。

無意識に持ったカゴをぶらぶらさせて、野菜コーナーを探す。野菜炒めくらい作って食べたかった。だが、フライパンの存在をまだ確認していない。もしあっても、油も必要だし、調味料も未確認のままだ。だいたいだが、冷蔵庫の電源すらまだ入れておらず、中がどうなっているか、使えるかも不明だった。風呂回りのものも買おうという考えもあつたが、脱衣所すら見ていない。そしてなによりお金も心もなかった。八十九円（税抜き）のプライベートルンドのカップ麺を一つと、十二個入りのバターロールの袋を二つ、カゴに入れてレジへ向かった。

バックバックは軽く、時々かしゃかしゃ鳴った。フードコートもまた人であふれていた。小さい子どもを連れた一見幸せそうにみえる家族がたくさんいる中に、大樹は紛れ込んでいた。昔、彼が目の前の子どもくらい小さいころ、家族で来たここは、古い大型スーパーで、フードコートも食堂っぽく、貧相なテーブルとイスが並べられていた。

今彼が身を置くフードコートはだいぶ違った。白と黒の木製テーブルが交互に並べられ、添えられた椅子も木製、座る部分は人工皮革で、最低限の特別感を押さえていた。シックな木目調の高い天井を見上げる。天井裏へ向ける小さな真四角の開閉口に惹きつけられる。

もう平凡な幸せとは遠いところに来てしまった。大樹は思った。それは子ども時代を失ってしまったときのような取り返しのない喪失感とも似ていた。この喪失感を経験しないまま、天寿をまっとうする人もいる。その人だけが、真の幸福者で、それは金があるからなのか、そういう単純なものでもなかった。運という、あやふやなもので片付けられるものでもない。複雑に絡み合った中から生まれる結論の一つ。途中の方程式はきつとAIでも解けないに違いない。そんなことを考えるだけ無駄なことはわかっただけだが、大樹は思わずにはいられた。未来というものが、酷く色あせてしまうと、過去が光り輝いて見える。

があつた。ホウキがたてかけてあつた。小学校の掃除の時間に使用するものより、もう少し立派なものが。

掃除機をかけたばかりのはずなのに、目立つくらいに虫の死骸が散乱していた。大樹は片っ端から、庭に掃きだした。ホウキで足りないところは再び掃除機をかけた。勢いがかつて、風呂場へ向かう。脱衣所は、どこよりも虫の死骸が多かった。いつから敷いてあるのかわからないマットを軽く振る。適当に掃除機をかけて脱出した。風呂場はやはりボイラーで、いったいどうやって使うのかまるきりわからなかった。ずっと、父親が担当していて、彼は少しも覚えようとしなかったのが、今になってツケとして返ってきた。

老婆の、桑西さんの家には風呂があるのだろうか。風呂のことを考えると体がかゆくなってきた。駅前の往復でけっこう汗もかいていた。実家を出てから、まだ一度も風呂に入っていないかった。躊躇することもなく、バックバックに着替えてタオルだけ入れて、裏の斜面を下った。

呼び鈴がない玄関戸をガラツと開ける。

「こんにちはー。桑西さん」と呼んでみるも反応はない。外壁とセイタカアワダチソウの隙間をぬつて、小さな庭のほうへ回ってみる。やはりいいない。玄関に靴がなかったのは近所へ出かけている可能性もある。目にとまったのは庭の一角の、セイタカアワダチソウの切り取られた場所。い

る。そして、その光は、彼のような生き物を強烈にひきつけた。

中身を空にしていったバックバックは、帰り道も重さはそんなに変わらない。緩い上り坂を必死にこいだ。このまま休火山帯の山へ向かう道だけに、どこまでも上り坂。緩いが長い。最後のほうは立ちこぎだった。道の両側は森が広がっていた。十五メートル以上もある、エドヒガンザクラが道路際に並び、新緑のトンネルを形成していた。正午過ぎの日差しは、新緑に遮られ、きらきらこぼれる間接照明程度だ。森を渡る風は涼しくさわやかだった。

通りに面して、築浅のおしゃれなログハウスが何棟か並んでいる場所があつたが、みな「売出中」の看板が立ててあつた。観光客向けの店がある反面、廃墟みたいな建物も多かった。みな逃げ出したのだろうか。逃げださなかった人は、なぜここに残っているのだろうか。放射能はもう存在しないのだろうか。放射能を出し続けている施設がいまだにある中、風向き一つで、また流れてくることはないのだろうか。流れる風景のように、そんな思考が現れては流れていった。

帰ってきて大樹が真っ先にやったことは、縁側に面した雨戸をあけたことだった。午後の少し弱くなった太陽の光が、縁側の奥まった場所まで照らす。ガラス戸のついた柵

つぶりかわからない好奇心にも駆られ、バックバックを背負いなおし、入っていった。

大人がちょうど通れるだけの幅で、セイタカアワダチソウが根元からなくなっていた。まっすぐ伸びる迷路は途中で右に折れた。数メートル進むと、今度は左に折れる。まっすぐ進むと、また左に折れ、さらにまっすぐ進むと右に折れ、ぱつと開けた場所に出た。そこではじめて、自分の歩いてきたところが、かつての田んぼのあぜ道だったとわかった。

四方をセイタカアワダチソウに囲まれた、二十メートル四方の空き地。その端っこに桑西さんがいた。しゃがみ込んでスコップをふるっている。

横から近づいてゆく大樹に気づいた老婆は、腰をあげ、辛そうに伸びをした。

「あら、せっかく訪ねてきてくれたのに、ごめんなさいねえ。今戻ってお茶でも入れるからね」

「あ、いや、大丈夫です。それより、草むしりですか?」

「ああ、これ?」と老婆は足もとを見る。

「ここね、昔田んぼだったのよ。でもね、このままじゃ田植えもできないでしょう。この草を抜いて、土を入れ替えないとダメみたいなのよ。ほら、放射能っていうの。臭いもしないし、色も変わらないのに、この自然がみんなダメになっているっていうんだから、変な感じよね。私なん

かには普通の土に見えるんだけどね。これが毒だつていうんだから、恐ろしい感じもするのよね」

老婆は遠くを見るような目をした。

「この草を全部抜きたいんだけど、ほら大きいでしょ。

なかなか根を張って大変なのよ。それに私の腰の具合も毎日いいわけじゃないのね。だから少しづつしか進まないの。息子たちが帰ってくるまでにはどうにか終わらせたいんだけどね」

大樹は近づいて、セイタカアワダチソウの根を確認する。根というか地下茎というものが転がっていた。根絶するのが難しいタイプのものだった。

「息子さんたちと連絡取れたんですか？ 帰ってくるって」

「違うのよ。わたしが勝手にそう思ってるだけ。でも、ここは故郷だから、いつかは帰ってくるんじゃないかしら。その時に、ここがこんなだったら悲しむでしょ」

開けた田んぼ跡を見渡す。甲子園の群衆よりも多いこのセイタカアワダチソウのすべてが、放射能に汚染されていて、その根がはびこる土のすべても毒されているという事実が大樹はあらためて、途方もないという感情を抱いた。だいたい、土のどのくらいの深さまで放射能が染み込んでいるのかもわからない。この巨大植物を刈って、一本一本根を抜くというのだから、ここまでだって、老婆一人では

くやっと思う。老婆の非力な手作業の姿を見て、蛮勇という言葉と次いで徒労という言葉が浮かんだが、わずかながら結果が出ているのだから、両方とも違うような気持ちもした。

「わたしもちょっと疲れちゃったわ。休憩にしましょう」

老婆は腰をげんこつで叩きながら、先に立って歩き出す。その少し曲がった背中に大樹は声をかける。

「この作業は毎日やってるんですか？」

老婆は立ち止まり「そうね、毎朝ね、畑の手入れをして、腰の調子がよさそうだったらね。でも無理はできないから、少しやったらあとは午後ね」

「大変なんですね……」と思案顔で答えながら、大樹は老婆についていった。なんにもしていないのにお茶を御馳走になった大樹は、風呂を借りることを言い出せず、日暮れ前に家へ帰った。老婆とは天気の話や、このあたりの食べられる野草の話をごく自然に話すことができた。似てはいないのだが、死んだ祖母との会話を思い出させた。そして、食べられる野草のすべてが放射能で汚染されていることを話しながら意識せずにはいられなかった。

朝、いつものようにべちゃんこの敷き布団で目が覚めた。頭のすぐ上の窓から何時のかわからない弱い光が漏れ差している。天井付近には囚われのトンボの遺骸。昨日、掃除

したにもかかわらず、布団のまわりは虫の死骸がちらばっている。スマホをいじくり、写真を見る。アルバムをさかのぼる。今はもうないマイホームの写真。庭に出した小さなプールにごく浅く水をはり、妻に抱かれながら水遊びをするもう会えない息子。家族の写真はある時期からぶつくりとなくなり、だいたい日付が飛んでからほんの数枚、妻の実家の畳の上でおもちゃを握って遊んでいる息子の写真があるだけ。妻の写真はなかった。

何が悪かったのか大樹は考えてしまう。自分はただ家族のために懸命に働いていただけだった。浮気もしなければ、酒の失敗もなく、趣味らしい趣味もなく、ただ職場と家との往復だけに費やしていた。それも特に不満はなかった。それなのに妻は出ていった。なぜ。原発が吹き飛んで、放射能がやってきた。そしてすべてを変えてしまった。

桑西さんの背中が目の前に浮かんだ。

悲壮だけれど、愚かな行為には思えなかった。

自分の生き方は、未だ見えなかった。でも、桑西さんを手伝う理由はある気がした。

二度寝しようとも思ったが、やめた。今までにない気力、それは小さなものだったが、なにかを感じていた。

セイタカアワダチソウ刈りを手伝うつもりでいた。

桑西さんを助けるというよりも、いやその気持ちもあるが、現状に対してやり返してやりた気持ちがあった。ここ

二、三日ならならしたので体力もあまっていた。

ロールパンを二つ、井戸水で流し込み、裏手の斜面を下った。下りながら見えたセイタカアワダチソウに覆われた旧田んぼは、砂利道から見ると見てもずっと広大だった。千坪や二千坪では到底きかないくらいに。手作業だけでどこまでやれるのか疑問だったが、老婆でもできるのだから、やりだすと案外簡単なのかもしれない。汚染された植物群なのだから、手袋があったほうがいいのかという思いもちらつとよぎった。

早朝なので悪いかと思ひ、先に桑西さんが作業していた現場へ行ってみた。朝も早いというのにもうセイタカアワダチソウと格闘していた。

「おはようございます」と桑西さんの後ろから声をかけた大樹は、彼女が手を止め振り返ると「手伝いますよ」と、鎌を受け取ろうと手を伸ばした。

大樹の存在と申し出に驚いた顔を見せた桑西さんは、それでも、素直に鎌を差し出した。「ありがとうね。この草ね、根のところか地下で伸びてつながつたりしていて、意外と太いのよ。だから、刈るのも下の方が楽よ。根は私が掘るわね」

セイタカアワダチソウを刈り取るのは簡単だった。力を使わない、という面においては。三本も刈ると、腰がぴりりと痛くなった。腰を思い切り曲げないと、セイタカアワ

ダチソウの根元のほうに届かないのだ。少し刈っては腰を伸ばし、少し刈っては腰を伸ばし、とやっていると、腰を曲げていられる時間がどんどん短くなっていった。腰が限界を迎えるころ「そろそろお昼にしましようか」という桑西さんの声で救われた。

「大したものが出せなくて申し訳ないけれど」と言いながら桑西さんは、ざるそばとルッコラやラディッシュのハーブサラダを手早く座卓に並べた。

大樹は、どうやっても腰が痛いので、あぐらをかいたり崩したりしながら、一番痛みの少ない姿勢を探していた。

昼食を堪能した大樹は、午後の草刈りを思い、少しげんなりした。こんなことをしていたら体が持たないし、毎日のようにこの作業を繰り返す桑西さんが凄いなと思った。そして「ちょっと買いだしに行ってきます」と、一度家に戻った。財布とバックバックを背負い、MTBで駅前を目指した。

駅の方へ向かうには、桜並木を通る。大樹はもう何度も往復しているが、この日初めて気が付いた。ふと見た並木の向こうに、ちらちらと黒っぽい袋のようなものが石垣のように積み重ねられた一角があるのを。この辺は、昔から畑もなく広大な空き地だった。それはかなりの距離で続いていた。

大樹が再び桑西家に戻ってきたのは、午後三時すぎだった。

めでいった。

耕運機のバッテリー切れにあわせて作業は終了した。セイタカアワダチソウの詰まったゴミ袋を積み上げ、奇麗にした土地を見て、大樹は心地よい達成感に包まれていた。

桑西さんの感謝の言葉を受けながら大樹は「明日からも毎日やりますよ」と宣言していた。

その晩、大樹は桑西さんの家で夕食も御馳走になり、風呂も借りた。テレビも見た。夜の十時前に、懐中電灯を借り、家の裏へ続く斜面を登っていった。

高揚感にも似た気持ちの高ぶりは、家に戻ってからもなかなか消えなかった。せんべい布団にあぐらをかき、かび臭いカーテンを見つめる大樹。誇らしいような気持ちが、いつぶりがわからない気持ちはどこから来るのか。元妻に今の自分の姿を見せたいような気がしていた。ささやかながら戦っていると言いたかった。元妻と同じ方向を向いていると思った。きつと今ならわかりあえるのじゃないかと、そう考えずにはいられなかった。この道がどこに通じているかはまったくわからなかったが、続けようと思った。

雨の日以外は、桑西さんの田んぼのセイタカアワダチソウ刈りに精を出すのが大樹の日常になった。田んぼは少しずつだがその姿をあらわし、敷地に積まれるビニール袋は増えていった。いつしかそれは大樹の日課のようになり、三食とも御馳走になり、風呂に入り、テレビを見て帰るの

た。二つの武器を手にも。駅前のホームセンターで、電動草刈り機とミニ耕運機を買ってきたのだ。放射能で汚染されたセイタカアワダチソウを入れるためのフレキシブルコンテナバッグも探したのだが、店には置いてなかった。大樹はその場からスマホを使ってネットから大量に発注した。さつきみた桜並木のアレのようにおそろく田んぼに並べるしかないのだからけれども、無造作にセイタカアワダチソウを積み上げるよりマシだと思った。ゴム手袋もついでにいくつか購入した。

二つの武器を自転車で運ぶのは大変だったが、一つはバックバックに差し、もう一つは、MTBのハンドルに乗せ片手で持ちながら、どうにかこうにか運んできた。バッテリーが充電済みのものを購入したのですぐに使えた。二つで五万円弱したが、これがないと、セイタカアワダチソウの大群とはやりあえないと思ったのだ。なにより、四十過ぎのなままた体がやられてしまう、と。

充電五時間で、駆動時間は五十分ちょっと。セイタカアワダチソウがすいすい切れた。五十分でも、今まで桑西さんが切り開いたくらいの面積を片付けることができた。草刈り機を充電している間は、耕運機を使って根を掘り起こした。大樹が「休んでいてください」といっても、桑西さんは「悪いから」といって、とりあえず、二重にしたゴミ袋に刈り取ったセイタカアワダチソウを鈍で叩きながら詰

が普通になっていった。

雨の日、家で一人、ロールパンなんかをかじっていると、どうしようもなく寂しくなり、夕方訪ねたりもするようになっていた。もちろん手ぶらだったが、桑西さんは喜んで招き入れてくれた。大樹は自分の家族のことも話すようになり、桑西さんは深く同情を寄せてくれた。いつの間にか大樹は、老婆のことを「ばあちゃん」と呼ぶようになっていた。

作業は順調だったが敷地が広過ぎて終わる気配は未だ見えなかった。それでも、大樹にだけは先が見えていた。もし、ここの除染に成功したら、自分の家のまわりも除染し、ここの別荘地全体の除染も進めて、そして、ここの土地の再出発をはかりたい。そこに大樹は自身の家族との再出発の思いも込め、夢見ていた。それが実現可能かどうかは問題ではなく、そこに彼なりのだが薄い浅やかな希望があった。

この地で生きる。普通に考えれば、そう単純でも簡単な問題ではなかったが、大樹は、そう夢見ていた。

ある日、いつものようにセイタカアワダチソウ刈りに精を出していると、郵便バイクがやってきた。桑西さんは、急いでいつもの「宛て処にたずねあたりません」の手紙の束を受け取りにいった。

なかなか戻ってこない老婆のことを背中まで待ちながら、大樹は作業を進めた。そして思った。自分も手紙を書こう。ちゃんと話もできぬまま、離婚し、離れてしまった妻と息子。自分の気持ちをちゃんと伝えよう。あの時は元妻たちの気持ちもわからなかった。でも今はわかる。誠実に向き合えば、やり直すことに同意してくれるはずだ。きっと自分を必要としてくれるに違いない。何より、彼は、今自分のやっていることの先に妻と息子の安全も含まれていると思っていた。この行動と思いを妻ならばわかってくれる、と。

夕方、風呂だけ借りと、大樹は、夕食は遠慮して、急いで家に帰った。桑西さんに、便せんなど一式をもらって。大樹が手紙を書くのは、小学校の頃の「家族への手紙」という宿題以来だった。大樹は何度も書いては消してを繰り返した。妻を思いやれなかった自身の未熟な姿勢や、組織や常識に縛られていた過去の自分を悔いた。全部をなくして初めて気付いたことや、今の生活も隠さずに記した。地域一帯の除染計画もしっかり記した。ただ、この地で云々というのは、妻に伝えるのは時期尚早と思ひ、そこにはあえて触れなかった。放射能をあれだけ恐れて実家に帰った妻だ。子どものことなども考えると、ここで生活云々なんていうのは、ここをすべてキレイにしてしまうまでは、うかつに伝えるべきではないと思った。日付をまたいで、

いた。

ふと、テーブルの上にある裏向きの封筒に気がついた。いつもの「宛て処にたずねあたりません」だろうと思ひ、表向きにした。そこには「桑西ミチ様」という宛名が書かれていた。一瞬わからなかったが、すぐに理解した。そして「手紙、返事来たんですね」と、台所方面へ声をかけた。よく見ると、差し出し人の住所が、元妻の家の近くだった。「ええ……」という声が返ってきた。

大樹は、家族が戻ってくるなら、作業スピードももっと上がるし、自分が離れたあとも、安心して任せることができると思つた。老婆が一人で寂しい思いをすることもない点も助かった。

「そうめんをゆでもって来た桑西さんは、思いつめた顔をしていた。そして「ごめんさい」と突然謝った。

「そうめんを食べ始めていた大樹には謝罪の意味がさっぱり理解できなかった。

「返事がきたわけじゃないのよ。わたしの手紙は全然届いていなかったんだけどね、向こうが新居を構えたからって、手紙をくれたのよ。農業はやめて、別の商売を始めたみたいなんだけどね、それがうまくいって、小さいけど中古の家も買ったから、わたしにこっちにきてほしいって」

無意識に大樹は、めんつゆの入ったお椀を混ぜていた。茶色く澄んだ液体に、中年男の歪んだ顔がぼんやりうつる。

ようやく手紙は完成した。

翌日、早朝の起床は間に合わなかったが、桑西家に顔を出して、ポストの場所を聞いた。投函してから、草刈りの作業を始めた。寝不足気味だったが、体中に気力が溢れていた。桑西さんにも、手紙のことを話した。彼女は「それは良いことだと思う」と言ってくれたが、どことなく元気がない気が、大樹にはしていた。そしてわかった。自分ここから去ってしまうことに、想いをはせているのだろうか。

「大丈夫ですよ。ここの田んぼを完璧にするまでは、出発しませんから」と大樹は老婆と約束した。でも内心は、妻に今すぐ来てほしい、と言われたら、行かざるをえないかもしれない、とも考えていた。その場合も向こうでの生活が落ち着いたら手伝いにしよう、と現実離れた言い訳を持ち出して、良心のうずきをおさえていた。

この地の出発を意識してか、大樹の作業スピードは格段に上がった。もちろん、すべての草刈りを終えるまでは時間がかかる。それでも、すべての土の入れ替えや、すべての草の始末も考えて、ネットショップでフレキシブルコンテナバッグをさらに追加で大量発注して、自分がいなくなつたあとのことも考えた。

手紙を出してから一週間近くがたつた。その日も、午前中の作業を終えて、大樹は、桑西さんの作る昼食を待つて

「それじゃ、ばあちゃんは行っちゃおうの？」

自分でも気持ち悪いと思うような子どもじみた言い方だった。

「ええ、荷物をまとめたら、なるべく早いうちに出発したいとは思ってるのよ。あなたには本当に申し訳ないんだけど。せっかく、田んぼをこまでもらったのに……」

「……い、いや、いいですよ。だって僕だって、家族の元へ行っちゃうから、その、ばあちゃんが一人になるんじゃないかと心配だったしさ。それに、ほら、あっちでも、意外と近所みたいだから、子ども連れて顔を見せに行くよ、こっちも落ち着いたらさ」

「そう？ そういつてもらえると、こっちも助かるよ。でも、あっちでも近所なんて、縁があるもんだね」

桑西さんは、そこで初めて笑顔を見せた。

「それじゃ、午後は、久しぶりにゆっくりしようか？」という彼女の提案を大樹は受け入れた。食後、食器を洗う音を聞きながら、テレビの音を聞きながら、畳でごろ寝をする。庭のほうから、青臭い風が入ってくる。うつらうつらしていると、遠くで郵便配達バイクの音が聞こえた。バイクは遠くで止まり、再び遠ざかって行った。

ぱつと大樹は起き上がった。きつと元妻からの手紙が家に届いたに違いない。自分の想いに応えてくれたのだろうか。それとも、どこかで一度話し合いの場がもたれるのだ

ろうか。もし、やり直せるなら、今度こそ、どんなことをしても家族のもとに駆け付ける。ちらっと、桑西さんのことが頭の隅によぎる。でも彼女だって家族の元へ行くのだし何も後ろ暗いことはない。でももし、今すぐ来てほしいと言われたら、正直に桑西さんに話して、明日にもここを出発しよう。そして、妻たちの元で落ち着いたら、きっと桑西さんを訪ねよう。そして、いつか、二つの家族でここに戻ってこよう。大樹の希望の翼は、大きく開き羽ばたく。桑西さんに断ってから、イヌブナの斜面を駆け上がる。

家の玄関前に息せき切って駆けてゆく。玄関の引き戸の横に、長いこと使われていない錆びまみれの朱色の郵便受けがあった。大樹はとって手をかけ、開いた。中には一通の手紙が入っていた。そんなに慌てることはないのだが、急いで、乱暴に封を切る。そして、何か変だと気づいた。封筒の表を見る。大樹が出した手紙だった。宛名の横に「受け取り拒否」と書かれていた。

玄関の前に立ちつくしたまま、何も考えられなかった。家に入り、敷きっぱなしの布団に仰向けた。窓から柔らかな風が入ってきて、大樹の額を優しくなでた。右目から、一粒だけ涙が落ちた。もう一度、妻の笑顔を見たいと思った。息子の髪の匂いを嗅ぎたいと思った。

桑西さんは三日後に出発していった。駅へ続く国道沿い

も、まだ彼の中には、ほんのかすかな希望があった。それは希望と呼ぶにはあまりにも淡かった。この作業は続けようと、大樹は思った。土も削り取って、完璧に除染しよう。まだ心は折れていなかった。いや、そう思おうとしていた。桑西さんは「よかったら、この土地も家も、譲るわ」と言い、家の鍵も大樹に渡した。

この土地から放射能を完全に除去して自身の家族を迎え入れるという、夢みたいなことが叶うのか、それともいつか元妻がわかってきて、向こうの家へと戻れる日がくるのか、大樹には何も確かなことはわからない。それでも、作業だけはやりとげようと、彼は決めていた。この土地で、草と土と放射能にまみれて格闘する彼の行為は、遠目からは徒勞に見えるかもしれない。でも、土は少しずつほんの少しずつ、確かに蘇っている。それは彼と桑西さんの力であることははっきりしていた。

駅の近くで見つけた銭湯へ向かいながら、大樹は小さく歌っていた。そしてエドヒガンザクラの並木をちらっと見上げ「バイトしよう」と呟いた。

(「星灯」5号より転載)

まで、大樹は見送った。去ってゆくタクシーが見えなくなるまでその場に立っていた。

家に戻った大樹は、裏の斜面を降りて、セイタカアワダチソウ刈りの作業場へ向かった。充電しておいた草刈り機を稼働させる。セイタカアワダチソウを刈るたびに、青臭い匂いが鼻をつく。よく晴れていたが風は冷たく、爽やかだった。つい一週間前、こうして作業しているときに大樹は、冗談めかして「ほんとに、これ全部、一人でやる気だったの、ばあちゃん」と言った。すると桑西さんは「でも、こうやって諦めないでやっていたら、あんたみたいに手を貸してくれる人がいたじゃない。今はだれも見えていないも、明日はだれか見てくれるかもしれない。今は一人で、明日は一人じゃないかもしれない。そういう淡い希望を大事に大事にするのが人生じゃないかしらね」と答えた。大樹は、自分にはまだ淡い希望があるのだろうかと思った。彼女には確かにあった。それだけは間違いないかった。

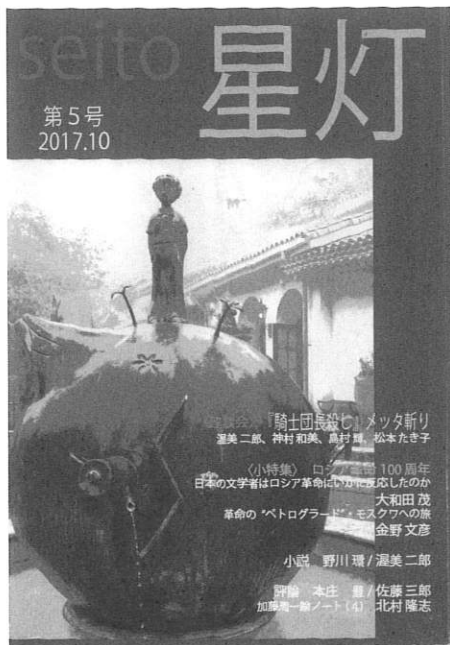
充電が切れるまで、草刈り機と耕運機を動かし、家に戻った。家の電源で再び充電し、バックパックに着替えをつめ、再び家を出る。クマイザサを蹴散らして、MTBをこぎだす。田んぼからセイタカアワダチソウを駆逐しても、何にもならないことはわかっていた。自分の努力があったから夢を見ていたのじゃないことも。桑西さんと一緒だったから、彼女の強烈な決意が彼を引っ張っていた。それで



野川 環

のがわ たまき

1979年 千葉県生まれ
千葉県立松戸馬橋高校卒業
2017年 第14回民主文学
新人賞佳作
第11回まほろば賞優秀賞
現在、埼玉県在住
自営業



星灯 東京都

「熱い心と冷めた目」

『星灯』は、二〇一四年十一月に創刊しました。年二回刊を目ざして、三年半で六号まで発行しました。まだまだひよっこの文芸同人誌です。

同人は、高校の英語教師でシングルファザー作家の渥美二郎と新聞の文芸担当記者で文芸評論家の北村隆志と、小林多喜二研究者の佐藤三郎の三人です。三人は、十年前の「蟹工船」ブームの中で知り合い、何か面白い雑誌をつくらうじゃないかと『星灯』を始めました。

「闇があるから光がある」

「創刊の辞」では、小林多喜二が恋人タキに書き送ったこの言葉を冒頭に掲げました。めざす文学は、小林多喜二と太宰治の統一です。理想をめざす「熱い心」と、現実に傷ついた「冷めた目」の共存です。

『星灯』のタイトルは、中国の古典『書経』の「星火燎原」からとりました。夜空の星のような小さな火が、いつか広い草原を焼き尽くすこともあるという意味です。小さな本誌がいつか日本の文学シーンを変える、そんな見果てぬ夢をこめました。

同人は三人ですが、発行にあたっては、同人の伝手を頼って、

これぞという筆者に原稿を頼んでいます。いわばサポーターとの共同制作の同人誌です。

これまで小説を寄稿したのは五人です。毎号登場している看板作家（？）が二人います。ひとりは前出の渥美二郎です。渥美は実は学生時代に谷川雁の指導を受けた、最後の弟子で、晩年の寝たきりの谷川のオムツをかえたことがあります。

もう一人の皆勤賞作家が、今回、優秀作に選んでもらった野川環です。前の筆名（たいらいさとし）で書いた「サクラサクサク」が昨年、やはり優秀作に選ばれており、二年連続の入賞に私も驚きました。作者も私たち同人大変栄誉なこと喜んでいました。

もうひとつ、本誌が特色を発揮しているのは、評論です。本数で見ても、これまでの評論・随筆などの寄稿者は十六人です。読者からも、けっこう評価をいただいています。

手前みそながら、私（北村隆志）は、創刊号に「加藤周一私記」を書きました。学生時代からの加藤周一体験と、新聞記者として宮本顕治（元日本共産党議長）追悼談話を取材した思い出をまとめました。二号からは、加藤周一の戦後の人生と文筆活動をたどる「加藤周一論ノート」を書きついでいます。

創刊号からの特集を並べてみます。

創刊号「特別インタビュー・作家・藤谷治「震災、太宰治・笑い」、ハンセン病詩人・御雄二さん追悼

星灯

第二号「多喜二「党生活者」を戦後70年に読む」
第三号「夏目漱石没後百年（小森陽一）「私を漱石研究者に転換させた『ころ』」他

第四号「八十三年ぶりの英訳「日本プロレタリア文学選集」、ヘザー・ポウエン「ストライク、ノーマ・フィールド共編」尊厳正義、そして革命のために」全序文（本邦初訳）

第五号「座談会「騎士団長殺し」メック斬り、小特集・ロシア革命一〇〇周年

第六号「評論「負け犬の社会主義」にならぬために——共産主義でいこう！」紙屋高雪

以上のように、毎号、特色を出すように工夫しています。

同人はたった三人ですが、居住地も仕事もバラバラのため、編集会議も合評会もしていません。これまでに三人全員が顔を合わせたのは、数回です。打ち合わせ、意見交換はほとんどフェイスブックのグループですまっています。興味のある方は「星灯のひろば」というグループを検索してください。だれでも見られます。

原稿料は出ない代わりに分担金もつけていません。それで一号につき一三〇〜一六〇頁、六百部を刷っています。この発行費用を毎回、三人の同人で負担したら大変です。でも、今のところ収支はとんとんです。贈呈・送付している人たちが、貴重な誌代・カンパを送ってくれるおかげです。読者（奇特な人たち？）に支えられて、何とか続けています。



星灯同人と寄稿者たち

〒182-0035 東京都調布市上石原 3-54-3-210
Mail: kitamura@c.email.ne.jp

星灯